

甲虫ニュース

No. 149
March 2005

COLEOPTERISTS' NEWS

中條道夫先生の思い出

佐藤正孝

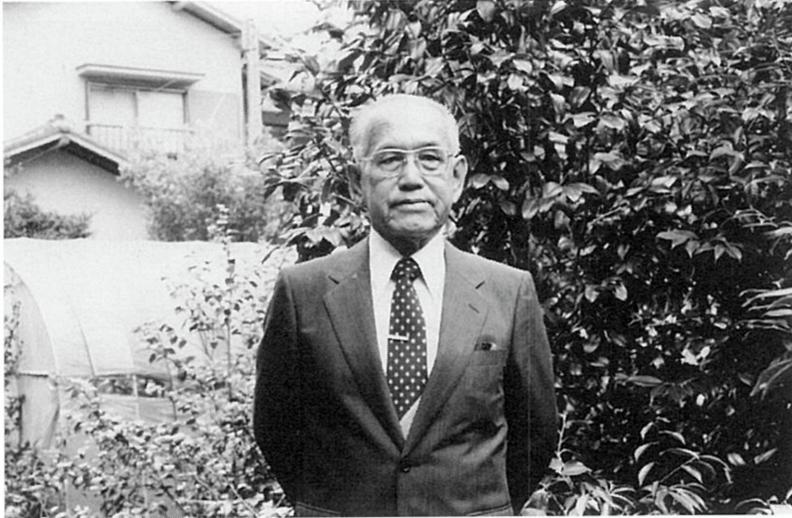


写真1. 1983年10月 静岡県三島の自宅にて

中條道夫先生に初めてお目にかかったのは、1956年8月香川大学学芸学部の研究室へ成瀬善一郎君（当時三重大学農学部在学中）とお伺いしたときである。その折、かつて台湾時代に先輩格の三輪勇四郎先生の（元台湾総監督府中央研究所農業部、故人）紹介状を持参したことから、この効果は観面で一介の浪人中の私ではあったが厚遇していただいた。残念なことに成瀬君は昨年他界した。この後、私は愛媛大学へ進学することとなり、郷里名古屋との往復に必ず中條先生を訪ね、藪子奥様（故人）を始めご家族にも公私共にお世話になった、というよりご迷惑をおかけした。その当時、交通機関は不便でかなり時間がかかり、私はよく夜行列車を利用し、夜遅くまで先生宅にお邪魔して夜中の宇高連絡船に乗ったものである。

私の学生時代には、遠征というのは琉球列島に限られていて、学生の身分では、東南アジアへは出かけることが困難であった。その琉球でさえもパスポートが必要で、身元引受人として高良鉄夫先生（元琉球大学学長）になっていただき渡航できたような状況であった。その頃、東南アジアへは、京大関係のスタッフが中心となり、色々な調査が行われていたが、得られた資料のうち甲虫類について中條先生がまとめの中心となられて、主として欧米の研究者と連絡を取られながら次々と報告されていた。先生には、研究者の育成も含めて多くの若い人達にその研究の機会を与えていただき、私の分野についても研究させていただくことができた。この影響は、その後における私の熱帯への回帰にも繋がった。

1983年10月に石田勝義君の結婚式が開かれるに際して、中條先生が出席されるのをよい機会として宿泊先



写真2. 1983年10月 三重県湯の山にて 中條先生と三輪先生

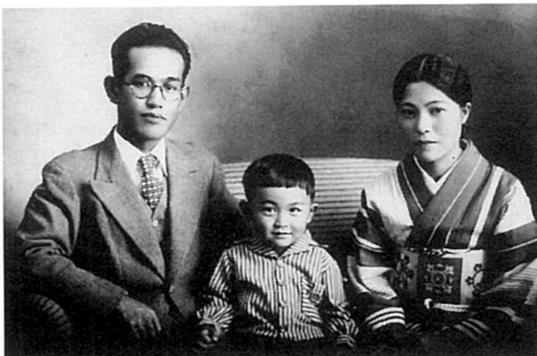


写真3. 1937年4月 台湾, 台北市にて 若き日の中條先生ご夫妻と長男の道崇さん

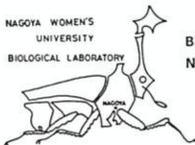


写真4. 1975年9月 福井県白馬洞にて 右から中條先生, 佐藤, 堀君



写真5. 1981年3月 名古屋にて 中條先生ご夫妻と対談する佐藤

NAGOYA WOMEN'S UNIVERSITY
BIOLOGICAL LABORATORY



BIOLOGICAL LABORATORY
NAGOYA WOMEN'S UNIVERSITY

Kuroishi, Shimada, Tenpaku-cho,
Tenpaku-ku, Nagoya 468, Japan
Tel. (052) 801-1133



CHUJOA UETSUKII
DORCUS MIWAI

Yunoyama, Mie Pref., Japan
1983. 10. 1.

明治と昭和の甲虫屋の集い
記念 1983年10月1日
三重県湯ノ山温泉

図1. 私製の初日カバー

を湯の山に定め、四日市在住の三輪先生をご招待して、「明治と昭和の甲虫屋の集い」と称して夜遅くまで両先生を囲んで台湾の思い出などをお聞きしたことが深い思い出となっている。参加したのは愛媛大学昆虫学研究室関係の久松定成、宮武睦夫、有田 豊、大林延夫、堀 義宏の諸氏と地元の市橋甫、石田昇三氏などであった。その折、三輪先生が、切手収集の趣味をお持ちであることから、両先生に献名された甲虫を消印に模して私製の初日カバーを作成したので、この機会にお目にかけておきたい。なお、両先生が台湾で活躍されたのは、第二次世界大戦も末期のころで、文献などでその様子を伺うことはできるが、手元にその当時をしのぶ写真が1枚あるのでこの機会に紹介しておきたい。1937年、それは私が生まれた年でもあった。中條、三輪両先生が台湾で活躍されたことに影響されたのか、私はその影を引きずるかのようになり、最近台湾との関係が研究上のことも重なりますますます深まっている。そこで、昨年末には標本のかんりの部分を台湾の国立自然科学博物館に寄贈することとなった。

香川大学を定年で退官されてからは、三島へ移られた。東京で生誕され、関東大地震で台湾に引越された経緯から、長年の夢が富士山の観られるところであったと伺った。庭には、各種の椿を植えて楽しんでいた。その後、心筋梗塞で倒られたのを機会に先行きの暮らしをお考えになり、東京蒲田へ居を移された。それは長女、菜摘さんの嫁がれた直ぐ前のマンションであった。丁度、1984年4月私が豊田市へ引越すことになった頃、先生が蒲田に移られることになったので、大事にしておられた庭の椿をいただき私も楽しませていただいた。

1972年香川大学を定年後、有田 豊君の尽力で名城大学農学部へお出でいただくこととなり、毎週いろいろとお話を伺う機会が持てたのは幸いであった。ほぼ10年近く、毎週三島から名古屋へ通われたわけであるが、先生が通勤に使われるバスが私の家の前を通るに際して、時として我が家の横着坊主が飛び出しては先生の乗ったバスを止めたりした思い出もある。

先生は、80歳過ぎまで研究を続けられたが、お若いときには実に美しい全形図をよく描かれたことは論著を拝見するほどに目に付くが、かなり短い時間で描き上げられる才能をお持ちのようであった。図説食葉はむし類(林野庁編、全国森林病虫獣害防除協会、1956)の著書をいただいた折、これに使った図は一夏の休みの間に書いたものだと伺った。

国外との交流のひとつとして、Niponius (Vol. 1, Nos. 1~20, 1959~1962; Vol. 2, Nos. 1~12, 1963~1967)を編集発刊され、毎号欧米の第一線で活躍中の研究者による論文が掲載された。その中で、1960年の1巻8号に *Glipa masataikai* を記載していただいたが、1960年7月トカラ中の島で採集した標本であったが、10月には美しい全形図と共に印刷された。その図は見事で、やはり毛筆で繊細に描かれたものであった。残念ながらこの種は *G. sauteri* Pic の変異個体としてシノニムとされた。1962年の1巻19号で、ホソガムシ (*Hydrochus*) のまともをイギリス自然史博物館の J. BALFOUR-BROWNE 博士と共著で印刷していただいた。私にとって初めての外国の研究者との業績であったので懐かしい思い出となっている。さらに、邦文の Mikado (Vol.1, Nos. 1~8, 1961~1971) を編集発刊された。

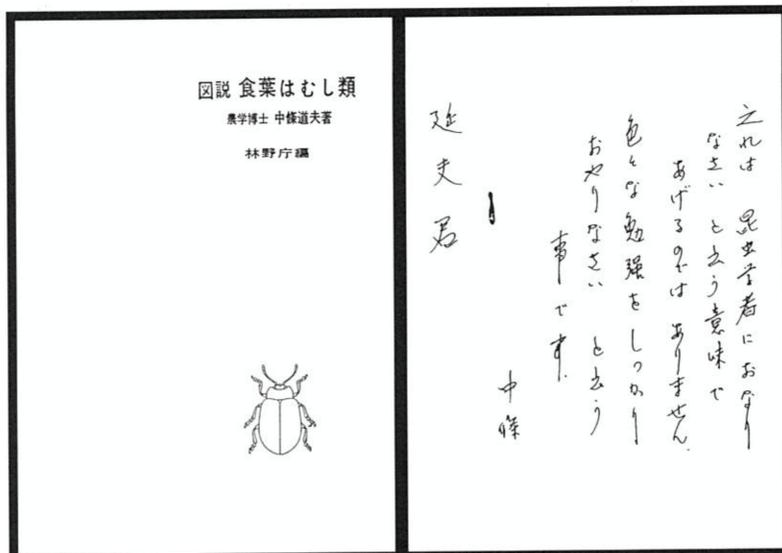
中條道夫先生が2004年6月9日にご逝去されたのは残念な思い出であるが、95歳という長寿を全うされた先生の甲虫界に残された偉業を偲び、心からご冥福を願うものである。ここでは長年ご指導いただいたさまざまな思い出を綴り先生を偲ぶ縁とした。なお、ご経歴については、Elytra に英文で書いたので併せて参考にされたい。
(名古屋市緑区)

中條先生の思い出

大林 延 夫

中條先生が亡くなられたという話を伺ったのは、昨年の夏ごろでした。戦中、戦後の日本の昆虫界を背負ってこられた多くの先達が第一線を退かれ、また訃報に接することも多くなって寂しい思いの中、また一つ悲しみが増えてしまいました。最後に先生にお目にかかったのは、もう十数年も前で、佐藤正孝さんと東京のお宅を訪ねたのが最後でした。その前は名城大学を退職されたあと、静岡にお住まいの頃に心筋梗塞で入院されていた先生をお見舞いに伺ったときでしたから、その間も永くご無沙汰をしていたこととなります。名城大学におられた当時は、お仕事の傍らツバキの収集に熱を入れられていました。先生から突然電話をいただき、神奈川県園芸試験場で作出した「相模佐助」の苗木を入手して欲しいという注文でした。当時この試験場に勤めていた私は、その年初めて品種登録したばかりのこの新品種の苗木を、担当者に無理矢理お願いして分けてもらい、お届けしたこともありました。

私が初めて中條先生にお目にかかったのは、たぶん、多分というのは私があまり自分の記録を残さず、古いことは片っ端から忘れてしまうからですが、高等学校の2年生の時だったと思います。名古屋から夏休みを利



用して四国に渡り、当時愛媛大学におられた宮武睦夫先生と久松定成先生に、黒尊や足摺岬、面河溪などの著名な採集地を案内していただいた帰り、高松の先生のご自宅に立ち寄らせていただいた時でした。その後愛媛大学に進学した私は、名古屋への行き帰りの時にはしばしば途中で中條先生のお宅に伺って教えを請い、奥様やお嬢様、また時には3人のご息子たちも交えていつも歓待をいただいたものでした。

思えば高校生あるいは大学に入ったばかりの、虫のことなど大して知りもしない私を、父との親交があったとはいえ、いつも暖かく迎えていただいた先生の懐の深さを思わずにはいられません。今、手元には、初めて先生にお目にかかったときにいただいた「図説食葉はむし類」という本が残っています。表紙を開けると、「大林延夫君へ進呈 著者」と書いてあります。そして、別に次のような一文をしたためた原稿用紙が添えられています。「之れは 昆虫学者におなりなさい」と云う意味で あげるのでは ありません。色々な勉強をしっかり おやりなさい」と云う事です。」

この本をいただいたときの感激は、そのたくさんのハムシの全形図の見事さと、「これは何年か前の夏休みを利用して一気に書いたんだよ」とおっしゃった時の驚きとともに今も忘れられない記憶です。この紙は、失くさないようにと今は表紙の裏に貼付けてありますし、折に触れて先生を思い出すよすがにもなっています。また、カミキリムシの検索図説を作っていたときには、全形図を描くのに先生の図をしばしばお手本にさせていただきました。昆虫学の大先輩で、数々の素晴らしい研究を残された中條先生ですが、私には学生時代の、父親にも似た暖かさの方が深く心に残っています。改めて先生のご厚情に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

(愛媛大学農学部昆虫学研究室)

中條道夫先生とスクナヒコナ

佐々治寛之

1959年10月、私は日本昆虫学会大会において、「特異な瓢虫科—新種とその分類的位置」という発表をした。従来の概念からすれば、果してテントウムシ科に入れてよいか問題になるほど特異な形態を示しているが、今までに知られていなかった重要形質を導入することによって、やはり、テントウムシ科とすべき確信を得た。講演のあと、「本当にテントウムシ科ですか？」と疑問が投げかけられ、その中に、『日本動物分類—偽瓢虫科』(1939)の著者、中條道夫先生もおいでだった。この虫は翌年(神谷, 1960), *Sukunahikona japonica* (ムクゲチビテントウ) という新属新種として記載され、新族 *Sukunahikonini* が創設された。

一方 REITTER (1889) は LEWIS が長崎で採集した小甲虫を *Alexia japonica* と新種記載した。中條(1938)は REITTER の用いた標本を再検討し、*Mychophilus* 属に所属するとし、翌年(1939), 『日本動物分類—偽瓢虫科』にチビテントウダマシの和名を付け、全形図を付して再記載した。

REITTER の記載した *Alexia japonica* の正体を確める必要が生じ、幸い、中條博士がかつて検した標本が台湾大学に保存されていることが判明したので、朱 耀沂博士の好意でその標本を調べることが出来た。それは、驚いたことに、私が記載したムクゲチビtentウ *Sukunahikona japonica* そのものだった。*Alexia* (= *Sphaerosoma*) でも *Mychophilus* でもないどころか、tentウダマシ科ではなく、れっきとしたtentウムシ科なのである。したがって、*A. japonica* REITTER, 1889 はtentウムシ科の *Sukunahikona* に移され、さらに *Sukunahikona* 属は *Scotoscymnus* 属のシノニムとなり、最終的にムクゲチビtentウ (=チビtentウダマシ) の学名は *Scotoscymnus japonicus* (REITTER, 1889) となった。

ムクゲチビtentウの 1959 年学会発表は私の初陣を飾る自信作であったが、中條先生が「本当にtentウムシか」とたずねられた訳は、実は単純な疑問ではなく、駆け出しの若い研究者の将来を見守る、大家の慈悲と教訓に満ちた深い意味があったのである。

ムクゲチビtentウとチビtentウダマシの関係を明らかにする過程で多くの点で中條先生にお世話になった。本文は先生からたくさんのお話を習った事柄の一端である。『動物分類』のチビtentウダマシの付図と、ムクゲチビの原因を並べたとき、今は亡き先生のほうふつを感じるのである。

(福井県坂井郡丸岡町)

中條道夫先生を憶う

森 本 桂

九州大学昆虫学教室に来られた中條先生に紹介するからと江崎教授から呼出しがあったのは、1954 年私が農学部へ進学した 3 年生の時である。それ以来、私の郷里高知への往復のたびに高松で途中下車して香川大学に先生をお訪ねし、時にはご自宅に泊めていただき、沢山のことを教えていただいた。

先生は、台湾から引き上げられた際、限られた荷物に分厚い学位論文の原稿 A taxonomic study on the Chrysomelidae from Formosa を持って帰られ、順次印刷公表されながら、無一物から分類研究を再出発されたのである。当時の香川大学農学部の建物は極めて粗末な木造であったことから、火事の際に文献類をすぐに持ち出せるようにと、木製の箱を積み上げて本棚にしておられた。高松市にある教育学部へ移られてからは本格的な文献と標本の蒐集を再開され、沢山の論文を執筆された。台湾時代のお話は大変貴重なもので、台北帝大昆虫学教室の標本や文献整備にまつわること、素木得一、三輪勇四郎両先生をはじめ台湾で活躍された諸先生に関するエピソード、台湾での採集の思い出など、大変楽しいものであった。

日本昆虫図鑑 (改訂版) (1950, 北隆館) で、ハムシ科の執筆も希望したのに外されたことを残念がっておられ、その補遺として「図説食葉ハムシ類」(1956, 林野庁) を書いたとお聞きした。先生は大変上手に図を描かれたが、ハナノミなどでは細かな筆の使用でやっとな柔らかな毛の感じが出せたと満足しておられた。

1965 年私が台湾大学昆虫研究室を訪ねた当時、中條先生が手書きで文献を複写した膨大な大学ノートが、鍵のかかったロッカーにそのまま保管されていた。複写機器もクーラーもない台湾時代、戦後ゼロからの再出発など、多数の論文と「日本動物分類」「Fauna Japonica」などの著作を見ながら、いままさらながら研究に傾注された膨大なご努力に、衷心よりの敬意を表すものである。

(福岡市東区)

中條道夫先生を偲んで

大 平 仁 夫

私たちの年代の虫屋で、中條先生を知らない人はいないと思われる。往時の台北帝国大学素木教授のもとで、三輪勇四郎先生らと甲虫類の分類学者として活躍。主として台湾のハムシ類の論文を次々と発表されていた。また、日本動物分類 (三省堂刊) ではオオキノコムシ類やtentウムシダマシ類などの総説を、1956 年に出された「図説・食葉はむし類」も先生らしい名著である。

戦後に香川大学教育学部教授として活動を再開され、「MIKABO」という刊行物を出されたりした。その頃に先生のもとに送られてきた青森の下山健作先生採集のコメツキムシを先生の指導でまとめたのがきっかけで、先生や下山先生とも親しく交流させて頂いた。香川大学定年退官後は、名古屋の名城大学農学部教授として迎えられ、1980 年までそこに在籍された。研究室には貴重な標本や文献類を持込まれ、地域の同行者は多大の恩恵を受けた。私も Thailand のコメツキムシを「自由にお使いなさい」といって頂戴した。名城大学の退職

を記念して「中條道夫先生退職記念論文集」¹⁾が出された。世話人は地元の佐藤・堀・有田・岡留氏らであるが、地域の同好者も多くがこれに協力して参画した。

先生は何事にもきわめて紳士的に対処されていて、言動だけでなく、その風貌や筆跡にも、また論文や解説書にも先生の風格がよく滲みでているように思われる。私の独りよがりの想像かも知れないが、素木一門の学風を最後まで残しておられた学者であったと思われる。後日、ご息の道崇様(福岡在住)から、6月9日に95才で肺炎で他界、近親者のみで静かに送り出したとの連絡を頂いた。先生のご性格から、それがよかったように思われる。先生は好きな甲虫を相手に、長寿を全うされた一生ではなかったかと思われる。先生のご冥福を心からお祈りする。

1) (1982): Special Issue to the Memory of Retirement of Emeritus Professor Michio CHŪJŌ: 185 pp.

(岡崎市舞木町)

中條先生 思い出をありがとう

豊 嶋 祥 子

中條先生、今どちらを旅していらっしゃいますか。先生より一足先に旅立った亡夫(豊嶋 弘)も、先生の話の伺いながら、捕虫網を持って同行しているのでしょうか。夫は幼少の頃から、自然を愛し昆虫が大好きで、昔から随分長い間、先生のご指導を受けていたようです。

私が中條先生に初めてお目にかかったのは、1968年頃、高松市のお宅へ夫と一緒に訪問した時でした。穏やかな笑顔で「豊嶋君、これはね、……。この虫はね、……。 」と言いながら、昆虫のことをいろいろとお話くださったので印象的でした。

その後、香川大学台湾・沖縄生物調査団(1970年7月20日～8月22日)の一員として、夫婦で参加させてもらい、台湾各地において昆虫採集を行った時に、常々ご指導を頂きました。訪台中も、団長として終始お世話くださった中條先生。私にとっては生まれて初めての海外での採集旅行。見るもの、採るものすべてが新鮮で珍しく、毎日毎日が感動の日々で、毒蛇のいることも忘れ、一生懸命捕虫網をふりました。アケボノアゲハ、ツマベニチョウ、カタゾウムシなどを最初に手にした時の喜びは今も忘れません。

また、採集したり入手できた昆虫類のうち、蝶に関しては、中條先生の本、『Vol. 1, No. 8, MIKADO 3・III・1971 (p. 59～p. 89)』に『台湾産蝶類採集記録(香川大学台湾・沖縄生物調査団報告 I)』として、発表させていただきました。あれから35年、採集した昆虫標本やスライド・写真を見るたびに、先生のにこやかな笑顔が今も鮮明に浮かんできます。多くの思い出をありがとうございます。

お住まいが関東に移られてからは、年に一度の年賀状で、お元気で過ごしたのと安心していましたが、もうこれからは先生の直筆でのお便りを読むこともなく、お声を聞くこともなく残念でなりません。私にとってはこの採集旅行だけが先生との貴重な思い出ではありますが、もし夫が健在ならば、若い時からの先生との数々の思い出が山ほどあったと思います。今となっては、私も夫から聞くことができなくなりました。今は先生と天国で一緒に過ごさせていただいて再びご指導を受けていることでしょう。

先生どうぞよろしく、やすらかに旅をなさってください。

(香川県綾歌郡国分寺町)

中條道夫先生の思い出

鈴 木 邦 雄

中條道夫先生ご逝去のお報せをご息の道崇さんからいただいた時、この数年、公私ともに様々なことが重なり、先生についてご無沙汰をしてしまったことが悔やまれました。先生には、東京農大農学部1年の時(1964年)に初めて手紙を差し上げました。先生は、すぐに葉書で「いつでも、何でも遠慮なく言ってきなさい」とご返事をくださいました。以来、いつも暖かく見守っていただき、ご指導ご鞭撻を賜ってまいりました。

学部3年の1966年6月、九州へ一人でのべ20日間ほどの採集旅行に出かけました。学部1年の夏、信州霧ヶ峰で1ヶ月半、キャンプ場の管理人のアルバイトをしながら採集を続けたことがありましたが、私としては初めての本格的な大採集旅行でした。当時、木元新作先生がおられた九大の英彦山の研究所を皮切りに、市房山から薩摩半島に向かい、錦江湾をフェリーで渡って佐多岬まで行きました。その帰路に、高松のお宅にお邪魔し、初めて先生にお目にかかったのです。手紙で予定と希望をお報せしたところ、「楽しみに待っている」

とのご返事をいただき、調査を終え、夜行急行で鹿児島を発つ時、電報で高松の着時刻をお知らせしました。翌日の昼前にお宅に着き、奥様に玄関脇の応接間に通され、緊張しつつお待ちしていると、厚さにして10センチほどのご高著の別刷を持って入ってこられ、「君が来るのを待っていた」とおっしゃって卓上に置かれました。とうとう中條先生にお目にかかることができたという思いで一杯になり、その時にどういふことをお話ししたのか、記憶が漠としています。やがて、お昼になり、奥様が讃岐うどんをご馳走してくださいました。暑い日で、今もその冷たい讃岐うどんの美味しさが忘れられません。ちょうど高校野球の地区予選か何かの熱戦が繰り広げられている時で、先生はテレビを観戦されながら食事をされ、しかも同時にご論文の校正をしておられました。奥様が笑いながら「いつもこんなふうなのよ」とおっしゃいました。その折は、先生宅に2晩泊めていただき、標本や文献類などを自由に見させていただいたのです。文献類は、研究者ごとに紙製の菓子箱を利用したファイルに整理されていました。昔、手書きで写された文献も拝見しましたが、特に台湾時代は暑かったので、手首に汗止めの手拭いを巻いて懸命に筆写したのだとお話くださいました。そうした文献には、どれにも丁寧な表紙が付けられ、同僚研究者の仕事に対する敬意が払われていることを感じました。それからもう40年近くが経ちます。

中條先生が台湾時代にまとめられた学位論文のお原稿は、終戦後、引き上げ船で内地へ帰還される際、バラバラにしてご家族の皆さんの布団の隙間に忍ばせて持ち帰ったというお話も伺いました。先生の学位論文は、A Taxonomic Study on the Chrysomelidae with Special Reference to the Fauna of Formosa. と題する4篇と、A Taxonomic Study on the Chrysomelidae (Insecta-Coleoptera) from Formosa. と題する11篇から構成され、先生が当時在職しておられた香川農科大学(香川大学の前身)の紀要の他、The Philippine Journal of Science や Quarterly Journal of the Taiwan Museum などに1951年から1962まで、のべ11年をかけて分割して出版された膨大なもので、学生時代以来、私の目指す方向への指針でした。先生は、学位論文において、ハムシ科の亜科以上の分類群の系統関係を、比較形態学を基礎として論じておられました。私は、学部の卒業研究のテーマを、ハムシ科の後翅翅脈相の比較形態に基づく上級分類群、特に亜科レベルの系統論と決め、学部3年の夏休み明けからせせとプレパラート標本を作成し、その数はおよそ1,500枚に達しました。ハムシ科の高次分類群の系統に関する文献も手当たり次第に集めました。先生の一連の学位論文も、それまでに3篇は古書店などで入手しておりましたが、他のものがどうしても入手できず、大野正男先生から拝借したりして写真に撮りコピーをしました。ところが、貧乏学生でしたので、プリント(当時は現像もプリントも全て自分でやっていた)をする印画紙代がなく、思い余って先生にもしほまだ別刷の残部に余裕があれば戴けないでしょうかと恐る恐る厚かましいおねだりをしたのです。折り返し先生から別刷が送られてきました。特に Philippine Journal of Science 誌に掲載された2篇は、26部しか別刷がなかったということで、添えられていたお手紙に「もう4人の子供たちに記念に残そうと思っていた分しか残っていないが、君を息子の一人だと思って送る」と認められており、感激すると同時に恐縮したことも昨日のこのように思い出されます。先生の学位論文は、1冊に製本してありますが、厚さは5.5センチほどもあります。

東京農大卒業後、都立大理学部大学院に進み、岡田豊日先生のもとで本格的にハムシ科を材料とする比較形態学的研究に打ち込みました。大学院在学中に、カナダの松田隆一先生が一時帰国された折のことで、当時、私は結婚して1年ほどしか経っておらず、妻の実家に住んでいましたが、松田先生に泊まっていたいただきました。翌日、ご母堂様のおられる川西に向かわれる先生をお見送りしたのですが、ちょうど東京の国立科学博物館分館で昆虫学会の支部大会が開かれている日で、中條先生もご出席のご予定ということを知っていましたので、松田先生を会場にお連れし、特別の師弟関係にあった両先生をお引き合わせするような役目を演じさせていただいた事も懐かしい思い出です。両先生が、感無量の面持ちで硬く握手をされているご様子が、今も目に焼き付いています。

中條先生のお仕事は、私にはどうしても乗り越えなければならない壁のような存在でした。1994年にフランスの P. JOLIVET 博士らの編集した『Novel Aspects of the Biology of Chrysomelidae』なる論文集に、私も Comparative morphology of the hindwing venation of the Chrysomelidae (Coleoptera) なるやや長文の論文を寄稿しました。学部の卒業研究以来取り組んできたテーマで、もとより未熟な論考ですが、それにおいては、翅脈の命名法を多くの分類群で行われていた COMSTOCK-NEEDHAM 方式ではなく、SNODGRASS 方式で整理された中條先生の学位論文での扱いを踏襲し、先生に献呈させていただきました。先生は、それは喜んでくださり、お若い頃の研究ノートなどをいくつも記念にといて送ってくださいました。ご自身で描かれた Megascelinae (ヒゲナガサルハムシ亜科) という中南米に分布する群の1種の全図の原画もその時に送ってください、「いつか君が何かで使える時があったら利用してくれたら嬉しい」とお手紙に書いてくださいました。なかなかその機会がないまま今日に到着していますが、最近、ハムシ科の高次分類に関する新しい説を提唱したこともあり、近いうちに、その日本語による解説記事を書くべく準備をしており、それに先生のその原因を使用させていただくつもりで、先生にはご無沙汰のお詫びも兼ねて、改めて報告をしたいと考えていたところで、先生に直接その報告ができなかったことが心残りです。

私は、学部の学生時代よりずっとハムシ科の高次分類に興味を持ってきましたが、そのためということもな

いのですが、ただの1種も新種の記載をしませんでした。私にとっては、それは結果的にそうだったという事に過ぎないのですが、ハムシ科の新種を記載する際には、その第1号には、ぜひとも先生のお名前を付けたいと思っておりました。還暦を迎えた昨夏、富山県下でクビボソハムシ属 *Lema* の新種を発見しましたので、先生に献名させていただき所存しております。

次々に思い出されることがありますが、ここでは、最後に、日本産ハムシ科の分類研究史において重要なことを一つ記しておきたいと思ひます。私の手許に、中條先生から「君に持っていてもらいたい」とのお手紙と共に数年前に送っていただいた8冊の小形のノートブックがあります。そのIの最初の頁には、「Type and some other specimens of the Japanese Chrysomelidae preserved in the British Museum」というタイトルが記されており、「Examined by late H. YUASA in 1951. Revised by S. KIMOTO in 1959. Revised by M. CHŪJŌ after 1961.」と記されています。先生のご生前に、もっときちんと伺っておくのがだったと悔いていますが、これらのノートブックは、湯浅啓温先生がBMで日本産ハムシ科のタイプなどを調査された際のノートを中條先生が筆写されたものです。これらのノートブックは、木元新作先生がBMにいらした折に持参され、コメントを追記しておられます。すなわち、見開きの右側の頁に中條先生独特の筆蹟で湯浅ノートが筆写され、左側の頁には木元先生による鉛筆書きのメモが書かれ、さらに中條先生のコメントも所々に記されているという貴重なものです。中條先生の手蹟は、日本字はもとより、横文字も本当に独特の美しさで、お手紙などを頂戴する度に感激しておりました。これら8冊のノートブックには、日本産ハムシ科の分類において重要な業績を挙げられた湯浅啓温・中條道夫・木元新作3先生のご努力のエッセンスが詰まっているわけで、いつかきちんとした形でその内容を整理・公表しておく必要を感じております(私には、その義務と責任があるように感じております)。そのノートブックも、実は初めて高松のお宅に伺った折に拝見していたもので、35年も経って「再会」し、不思議な巡り合わせを感じたことでした。

思い浮かぶまま、とりとめなく書きました。中條先生のごことは、とても語り尽くせません。40年もの永きにわたってご指導をいただくことのできた幸運を噛みしめつつ、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。中條先生、本当にありがとうございました。合掌。

(富山大学理学部生物学教室)

○ミヤマヒラタハネカクシの新たな採集例

ミヤマヒラタハネカクシ *Quedius (Microsaurus) abnormalis* は、日光山地の雪渓際から採集された個体に基づいて、SHARP (1889) によって記載・発表された。この種および近縁の種は、いずれも複眼が縮小し、後翅が退化したきわめて特徴的な形態を呈し、地中性種としての形態的適応がうかがわれる。本種の分布に関する記録としては、SHARP による原記載以後、渡辺 (1988) によって赤城山が産地として記録された以外、今日まで新たな採集例の報告はなかった。最近、足利市在住の大川秀雄氏から那須山地で採集された本種をご恵与頂くと共に、採集方法についてもご教示を受けたので、これらについて報告し同氏のご厚意に報いたい。なお、那須山地で採集された個体は基準産地産の個体に比し、雄交尾器の中葉が相対的に短く、側葉より僅かに長いこと、側葉末端中央の切れ込みが幾分幅広く、より短い点が認められるが、これらの差異は種内変異と考えられる。

下記の採集データには、採集地はすべて栃木県黒磯市百村大川林道(標高約800m)なので省略し、採集個体数、採集年月日および採集者のみを表示した。

1♂, 7. II. 2002, 大川秀雄採集; 2♀♀, 6. X. 2002, 大川秀雄・恩田賢吾採集; 1♂, 19. X. 2002, 大川秀雄採集; 2♂♂, 3♀♀, 28. IX ~ 23. X. 2004, 大川秀雄採集。

採集者の大川秀雄氏によれば、2002年に採集された個体はタッパーウェアに穴をあけ、中に酢酸

と蛹粉を混ぜたベートを入れ、約50~80cmの土中に埋め込んだ「埋め込み式トラップ」で、一方、2004年の採集個体はペットボトルに穴をあけ、中に酢酸と蛹粉エキスを混ぜたベートを入れ、約30~50cmの土中に縦に埋め込んだトラップで採集されたとのことである。

これに反して、従来から行われているコップにベートを入れた「外置きトラップ」を大川林道に設置した場合は、より標高の高い日光で行った場合に比べてきわめて低調な成績であったという。この結果について、大川氏は標高の低い地域では地表近くで本種を採集するのは難かしく、このことは本種の生息場所が標高の高低と関係しているのではないかと示唆されている(私信)。なお、本種に近縁のミョウコウツヤムネハネカクシの発見者である故馬場金太郎博士が、妙高高原東麓の関見峠で横穴を掘った中にトラップを設置し、再び穴をふさいで数日後に掘り出したトラップから多数の個体を得た事例とを考え合わせると、この種群の採集方法として「埋め込み式トラップ」が有効な手段と思われる。

引用文献

- SHARP, D., 1889. The Staphylinidae of Japan. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (6), 3: 28-44 [Part IV].
 渡辺泰明, 1988. ミヤマヒラタハネカクシ種群の分布と種分化. 佐藤正孝(編), 日本の甲虫—その起源と種分化をめぐって—, pp. 66-77. 東海大学出版会, 東京.
 (東京都町田市, 渡辺泰明)

日本産ナガシクイムシ科ヒラタキクイムシ亜科7種の分布の性格付け ——自然分布種か移入種か——

岩田 隆太郎

Distributions of seven Japanese lyctine species (Coleoptera: Bostrycidae):
Natural or artificial?

Ryūtarō IWATA

ナガシクイムシ科ヒラタキクイムシ亜科(もとヒラタキクイムシ科)は亜熱帯～熱帯起源で、しばしばゾウムシ科クイムシ亜科と混同されるが、これとは全く系統や生態の異なる木材穿孔性甲虫の一群であり、混同を避けるために科名まで含めた和名の変更の必要性が示唆されている(岩田, 1988; 岩田, 1995; 後藤, 2005)。ほとんどの種が極端に乾燥に適応し(岩田, 1990)、それ故建築材や家具などを食害する家屋害虫となり、人為導入分布が多く、世界各地の本亜科の原種相の推定は困難を極める。

筆者は、昨今の動植物の移入種問題の高まりに伴って、本亜科の日本国内での分布とその性格付け(自然分布か人為分布か)についてコメントする機会が増えたことにより、この問題をまとめようとしていたが、その矢先、本亜科の日本における最初の分類学的レビュー(中條, 1937)の著者である中條道夫先生の訃報に接した。御冥福をお祈りするとともに、本稿を中條道夫先生の御霊前に捧げたい。また、標本検視に際して御高配を賜った平野幸彦氏(小田原市)・西川正明氏(海老名市)に深く御礼申し上げる。

ヒラタキクイムシ類の分布の性格付け法

そもそもヒラタキクイムシ亜科をはじめとする乾材害虫の分布を論じる際には、ある種がある土地で記録されるについて、(a) 自然分布、(b) 人為導入後定着、(c) 人為導入後死滅して未定着、の3つの性格付けが可能である。ここで岩田(1988; 1991)は、日本における本亜科各種の自然分布を断じるに際しての当面の指標として、その種が日本国内の屋外で発生可能かどうかを重要視した。これは、移入種の発生に必要な終年乾燥状態にある材が、比較的湿潤な日本(特に梅雨期のある本州以南)の国内の野外においてはほとんど見いだされず、日本の自然分布種は日本の屋外での準乾燥材に適応しているはずであること、および屋内発生の場合やよすると冬季終日暖房完備の環境にさらされ、ナラヒラタキクイムシ *Lyctus linearis* (GOEZE) やケヤキヒラタキクイムシ *Lyctus sinensis* LESNE のような冬季低温暴露要求性の北方系冬季休眠性種は、こういう状況下および実験室での恒温飼育では越冬発生ができないという事実(KÜHNE, 1981; IWATA, 1989)に基づいている。

日本産各種とその分布の性格付け: 文献レビュー

これまでに日本から記録のあるヒラタキクイムシ亜科各種について、その分布の性格付け(自然分布か人為分布かの区別)に関する錯綜する文献記述を概観する。まず保育社の甲虫図鑑において酒井(1985)は、当時日本から知られていたヒラタキクイムシ亜科全6種、ケプトヒラタキクイムシ *Minthea rugicollis* (WALKER)・アラゲヒラタキクイムシ *Lyctoxylon dentatum* (PASCOE)・ナラヒラタキクイムシ・ケヤキヒラタキクイムシ・ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* (STEPHENS)・アフリカヒラタキクイムシ *Lyctus africanus* LESNE につき、「自然分布の可能性はケヤキヒラタキクイムシのみ」と記し、桐谷・森本(1993)および MORIMOTO & KIRITANI(1995)は理由を明示せずこれら6種すべてを外來種とした。奥谷(2002)のリスト、および日本生態学会の「外來種ハンドブック」(村上・鷲谷, 2002)では、同様に6種をすべて帰化種としている。平野(2003)の記述はこれに沿うものである。その後アメリカヒラタキクイムシ *Lyctus planicollis* LeCONTE が広島県で見いだされた(岩田・池田, 1996)が、定着には至っていないもようである。

この問題に関する筆者(岩田, 1981; 1988; 1995; 他)の論旨はほぼ一貫しているが、これは本稿の結論を御覧頂きたい。

野外発生と自然分布

全7種のうちで日本国内で野外発生が見られたとする記録は、北海道における本種ナラヒラタキクイムシ(岩田, 1991; 芳賀, 1993)、本州でのケヤキヒラタキクイムシ(岩田, 1981; 1988)、大阪府におけるヒラタキクイムシ(岩田, 1991)に限られる。ヒラタキクイムシの膨大な数の発生例はすべて家屋内のものであり、最後の大阪府でのヒラタキクイムシの発生例は野外のビニールシート下の材でのものにて、例外視すべきであろう。そして現在の所、ナラヒラタキクイムシの本州以南での屋外発生の明確な記録は見られない。以上のこと、

およびその他の知見を総合的に判断すると、北海道でナラヒラタキクイムシが、そして本州でケヤキヒラタキクイムシがそれぞれ自然分布し、両種がブラキストン線の南北で置換種関係にあるという古来の状況(岩田, 1981; 岩田・中根, 1988)が明らかとなる。両種は中国にも分布し、自然分布境界線としてのブラキストン線の西方の大陸への延長は当然問題となろう(IWATA, 1989)。

ナラヒラタキクイムシの国内分布とその性格付け

ここで問題となりやすいナラヒラタキクイムシについて詳述する。この種はユーラシア大陸北部の土着種であり、国外では華中、ロシア(クリミア・カフカス)、ポーランド、ハンガリー、フィンランド、スウェーデン、ドイツ、フランス、オーストリア、イギリス、北アフリカ、カナダ、アメリカ合衆国、チリーに分布し(岩田, 1988)(この内南北アメリカ大陸の分布は人為導入によるものと考えられる)。国内では北海道における分布が知られている(松下, 1929; 1931; 1943; 中條, 1937; 1958; 1982; 小泉, 1970; 服部・長谷川, 1970; 土居, 1990; 岩田, 1991; 芳賀, 1993)。本種はケヤキヒラタキクイムシに酷似するが、ケヤキヒラタキクイムシでは触角末端節が左右非対称に膨張し、ナラヒラタキクイムシでは前胸背中央に縦長に浅い窪みを有することで区別できる(岩田, 1988)。本種の生活史や生態については、KOJIMA(1932)(東京大学の小島俊文氏)により、当時としては珍しい日本人の海外(ドイツ)留学の研究成果として、詳細が明らかにされている。

本種は北海道の他に、本州から度々記録されている。中根(1963)は、北隆館の大図鑑において本種の分布を「北海道・本州; 全北区」とし、野淵・古田(1969)は本種が栃木県日光にて採集されたことを故中根猛彦博士の私信として報じ、後に野淵(1992)はこれに従って本種の分布を「北海道・本州北部」とした。野淵・古田(1969)の記述については、日光という、自然環境を強く意識させ北方にもつながる地名が、本種のその地での自然分布を暗示していたが、岩田・中根(1988)が、かつてこの第二著者(中根)が本種とケヤキヒラタキクイムシを取り違えていたことに起因する誤りとし、この日光の記録はケヤキヒラタキクイムシの福島県岩館村からの記録に書き換えられ、抹消された。同時に岩田・中根(1988)は、中根(1963)の記述の根拠を戦前の東京都目黒からの本種の標本に帰し、これは当時そこに存在した林業試験場(現: 森林総合研究所、つくば市)の関係が疑われ、人為導入による可能性が高く、東京では未定着とした。森(1975)は、本種が「わが国では北海道にのみ生息していたが、現在本州において時々採集されている」と記した(これは妥当な表現として評価できる)。

大倉・他(1965)は本種を大阪府北部箕面周辺の甲虫リストに加えたが、岩田・中根(1988)は、これをケヤキヒラタキクイムシとの取り違いによるものと示唆した。

菊屋(1988)は大分市の家屋害虫・有害動物リストに本種を加えた。これ以外、現時点でも九州からはナラヒラタキクイムシ・ケヤキヒラタキクイムシともに未記録である。大分市におけるこの記録は、ケヤキヒラタキクイムシの誤認(この場合この種の九州初記録)、欧米や北海道からのナラヒラタキクイムシの人為導入(定着せず)、その他の種の誤認の可能性が考えられる。いずれにせよ九州にはナラヒラタキクイムシは自然分布しないであろう。

高橋(1991)は神戸市と兵庫県出石町から本種を記録したが、これについて高橋(1992)は、後に筆者の私信に基づき神戸市の標本を再同定してケヤキヒラタキクイムシに訂正し、出石町の標本は未検とした。

西川・丸山(1993)は神奈川県座間市から本種を記録したが、これについては、平野(2004)が筆者のコメントに従って再検視の必要性を示唆した。そこで筆者は関係者(平野幸彦氏・西川正明氏)の御厚意により当該標本(1 ex., 神奈川県座間市芹沢, 1. vii. 1989. 西川正明採集)を検視することができた。その結果これは紛れもなく本種ナラヒラタキクイムシであることが判明した。これは恐らく、米軍厚木基地(綾瀬市)や米軍キャンプ座間が発生源と思われる。神奈川県林産害虫移入種には、米軍関連施設の関連が疑われる発生が多く、シロアリ目(岩田, 2004)やヒラタキクイムシ科未同定外国産種(岩田隆太郎・田中和夫, 未発表)で例が見られる。

田中・山野(1997)は栃木県佐野市での本種の屋内採集記録を報告し、これを偶産とした。これは上述の日光と同県ながら平地での記録のようで、同定は確実に、著者のいうとおり人為導入記録で、佐野市では未定着と考えてよいであろう。

この他にも、筆者の見落としているナラヒラタキクイムシの本州などからの記録が存在する可能性がある。

いずれにせよ、ナラヒラタキクイムシは上述のように冬季低温暴露要求性の北方系冬季休眠性種であり、冬季低温にならない大型建築物の中では継続発生ができない。しかし、以上のように本州で度々人為導入による発生例が見られる。冬季低温となる一般家屋内やその周辺の屋外では継続発生が可能なので、本州での定着は南北アメリカ大陸と同様十分可能性がある。

その他の種の分布の性格付け

その他の種では、ケヤキヒラタキクイムシの四国からの記録(岩田, 1981)、およびアラゲヒラタキクイムシの石垣島からの記録(CHŪJŌ, 1970)は、性格が不明である(岩田, 1988)。ケヤキヒラタキクイムシの北海道で

の発生例(岩田, 1988)は明らかに人為導入に基づくもので、恐らく未定着であろう。

ヒラタキクイムシは日本各地で、アフリカヒラタキクイムシ、ケプトヒラタキクイムシ、アラゲヒラタキクイムシは一部の都府県で、それぞれ家屋内のみで発生が見られ、いずれも海外から人為導入後定着した種と考えられる(各種の詳しい分布などについては岩田(1988; 1995)の解説を参照されたい)。

結 論

以上まとめると、ナラヒラタキクイムシは欧州とともに北海道において自然分布しており、栃木県・東京都・神奈川県など本州で人為導入記録が見られるが当面は未定着。ケヤキヒラタキクイムシは本州のみで自然分布し、北海道に侵入するも未定着、四国での性格は不明。それ以外の5種はいずれも本土では移入種で、この内アメリカヒラタキクイムシのみは日本では恐らく未定着と考えられることとなる。

物品の流通に伴い、今後新たな種が海外から日本に導入され、かつ国内記録種がこれまで未記録だった地域から新たに見出されることが予想され、こういった「予言」は実際過去に的中している(岩田・池田, 1996)。いずれにせよ本亜科諸種の分布論は、過去も現在も未来も動的状況にある。

引用文献

- 中條道夫, 1937. 長蠹虫科・扁蠹虫科(昆虫綱-鞘翅群). 日本動物分類, 10-8(7): 1-103.
- 中條道夫, 1958. 日本産長蠹虫科及び扁蠹虫科の解説. あげは(松山昆虫同好会誌), (6-Suppl. 1): 1-15.
- CHŪJŌ, M., 1970. Family Lyctidae. *Memoirs of the Faculty of Education, Kagawa University, Part II*, (192) (Coleoptera of the Loo-choo Archipelago (II)): 32-33.
- 中條道夫, 1982. しろあり以外の建築害虫[5]: ナガシクイムシ科とヒラタキクイムシ科. しろあり, (50): 32-48.
- 土居修一, 1990. 北海道におけるヒラタキクイムシ対策. 家屋害虫, 12(2): 119-124.
- 後藤秀章, 2005. 「クイムシ」の示すものとは: 学名でも和名でもない呼び名をどう扱うか. 昆虫と自然, 40(1): 37-42.
- 芳賀 馨, 1993. 上土幌町上土幌駅跡土場で採集された甲虫: その多様性と生態学的意義について. 上土幌町しがし大雪博物館研究報告, (15): 1-39.
- 服部睦作・長谷川 恩, 1970. 近年北海道に発生した家屋害虫について. 北海道立衛生研究所報, (20): 87-90.
- 平野幸彦, 2003. 神奈川県産甲虫の外来種について. 神奈川虫報, (144): 67-88.
- 平野幸彦, 2004. 神奈川県の外来種補遺. 神奈川虫報, (145): 86-87.
- 岩田隆太郎, 1981. ケヤキヒラタキクイムシの発生例, 及びその分布と生態に関する諸考察. 昆虫と自然, 16(9): 16-20.
- 岩田隆太郎, 1988. 日本産ヒラタキクイムシ科の分類および各種の分布と生態特性について. 家屋害虫, (35/36): 45-54.
- IWATA, R., 1989. Chilling requirement for pupation in *Lyctus sinensis* Lesne (Coleoptera: Lyctidae). *Applied Entomology and Zoology*, 24(4): 478-480.
- 岩田隆太郎, 1990. ヒラタキクイムシの生態と飼育(1): 生態. 家屋害虫, 12(2): 143-148.
- 岩田隆太郎, 1991. ヒラタキクイムシ科の屋外発生. 家屋害虫, 13(1): 22-24.
- 岩田隆太郎, 1995. ヒラタキクイムシ. 家屋害虫事典(日本家屋害虫学会, 編). 井上書院, 東京: 243-252.
- 岩田隆太郎, 2004. シロアリ目. 神奈川昆虫誌. 神奈川昆虫談話会, 小田原: 207-208.
- 岩田隆太郎・池田作太郎, 1996. アメリカヒラタキクイムシの日本国内における初めての発生例. 家屋害虫, 18(2): 95-98.
- 岩田隆太郎・中根猛彦, 1988. ナラヒラタキクイムシの国内分布について. 昆虫と自然, 23(1): 16.
- 菊屋奈良義, 1988. 大分市街地の有害動物相. 大分生物談話会誌, (4): 69-75.
- 桐谷圭治・森本信生, 1993. 日本の外来昆虫. インセクタリウム, 30(4): 120-129.
- 小泉 力, 1970. ナラ, ラワン材の害虫: ヒラタキクイムシ類の被害. 北方林業, 22(2): 57-59.
- KOJIMA, T., 1932. Beiträge zur Kenntnis von *Lyctus linearis* GOEZE. *Zeitschrift für Angewandte Entomologie*, 19: 325-356.
- KÜHNE, H., 1981. Methods of culturing Lyctidae (Coleoptera). *Material und Organismen*, 16: 141-156.
- 松下眞幸, 1929. 櫛材を害する「ならひらたきくむし」に就て. 北海道林業会報, 27(5): 300-303.
- 松下眞幸, 1931. 「ならひらたきくむし」に就て. 昆虫世界, 35(403): 79-80.
- 松下眞幸, 1943. 森林害虫学. 富山房, 東京.
- 森 八郎, 1975. 文化財害虫のリストと虫害に対する保存科学. 古文化財の科学, (19): 24-60.
- MORIMOTO, N. & KIRITANI, K., 1995. Fauna of exotic insects in Japan. *Bulletin of the National Institute of Agro-Environmental Sciences*, (12): 87-120.
- 村上興正・鷲谷いづみ(監修), 2002. 外来種ハンドブック(日本生態学会, 編). 地人書館, 東京.
- 中根猛彦, 1963. ヒラタキクイムシ科. 原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫篇). 北隆館, 東京: 第90図版, 180.
- 西川正明・丸山 清, 1993. 座間市の甲虫目. 座間市の動物. 座間市教育委員会, 座間: 219-308.
- 野淵 輝, 1992. 乾材害虫I: タマムシ, ナガシクイムシ, ヒラタキクイムシ. しろあり, (90): 29-54.
- 野淵 輝・古田公人, 1969. ナラ・フローリングに発生したヒラタキクイムシについて. 第80回日本林学会大会講演集: 267-268.

大倉正文・後藤光男・林 匡夫, 1965. Coleoptera 鞘翅目 (甲虫類). 山地利用調査資料 (大阪府農林部), (5) (箕面山の動物相調査): 150-214.

奥谷慎一, 2002. 外来動物と家屋害虫. 家屋害虫, 24(1): 1-8.

酒井雅博, 1985. ヒラタキクイムシ科 Lyctidae. 原色日本甲虫図鑑 (III) (黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 編著). 保育社, 大阪: 第 22 図版, 134-135.

高橋寿郎, 1991. 兵庫県甲虫類 (3) (兵庫県甲虫相資料 252). Crude (大阪昆虫同好会), (35): 3-8.

高橋寿郎, 1992. ナラヒラタキクイムシについての訂正. Crude (大阪昆虫同好会), (37): 24.

田中和夫・山野倫子, 1997. ヒラタキクイムシ類 4 種の国内採集記録. 家屋害虫, 19(2): 84-85.

(日本大学生物資源科学部)

○マレーズトラップで得られた北海道未記録の甲虫類

丸山宗利博士からマレーズトラップで得られた多数の北海道産の液浸標本が届いた. この中から興味深い甲虫を抜き出したが, いくつかの日本未記録種があり, 特にタマキノコムシ科のものが目立った. 当然ながら北海道未記録種もあり, トラップの威力に改めて驚かされた. ここには新記録と思われる甲虫類 5 種を報告する. 未記録の確認は保田信紀氏作成の「北海道産甲虫目録 (仮目録)」でチェックし, 丸山宗利, 堀繁久両氏の協力をいただいた. 記して感謝の意を表す. また, 上杉謙太, 大川あゆ子, 溝田浩二氏などの採集者をはじめ, ソーティング作業をされた方々に厚く御礼申しあげる.

1. クシモモタマキノコムシ *Triarthron maerkeli* MARKEL

1 ex., 江別市野幌, 18. Jul. 2000, 上杉謙太.

触角の球桿が 3 節で, ♂の後腿節に針状突起がある特徴のある種. ヨーロッパなどにも分布する種で, 国内では本州のみの記録. かなり少ない種である.

2. ニセクロハナボタル *Plateros hasegawai* NAKANE et BABA

1 ex., 江別市野幌, 1. Jul. 2000, 上杉謙太.

外見はクロハナボタルによく似ているが, 保育社の図鑑に図示されているように, 交尾器は全く異なっている. 本州のみから知られており, 多くない種である.

3. ムナビロネスイ *Rhizophagus nobilis* LEWIS

1 ex., 札幌市宮の森, 11. Jul. 2000, 上杉謙太.

従来の分布は本州, 四国, 九州であった.

4. カドコブホソヒラタムシ *Ahasverus advena* (WALTL)

1 ex., 帯広市川西町, 22~28. Aug. 1995, 大川あゆ子.

少ない種で, 本州, 九州の分布であった.

5. クビレヒメマキムシ *Cartodere constricta* (HUMMEL)

1 ex., 帯広市川西町, 17~23. May 1995, 大川あゆ子.

外来種なので分布していてもおかしくない. 従来の分布は本州, 九州, 汎世界.

(小田原市, 平野幸彦)

○新潟県湯沢町でオオスズメバチの死体に誘引された? ナミクシヒゲハネカクシ

山屋・桜井 (2004) は, 新潟県湯沢町から記録されたトンボ目, 鞘翅目, 鱗翅目の目録を発表し, その中でハネカクシ科の種を 70 種記録した. 筆者は, この目録に含まれていないナミクシヒゲハネカクシ *Velleius dilatatus* (FABRICIUS) を同町内で採集しており, その採集時の状況にも特記すべきものがあったので, 記録しておきたい.

1♀, 新潟県南魚沼郡湯沢町三保 (清津川左岸, 苗場山林道入口付近. 環境省メッシュ番号 5538-26-71), 30. VII. 1995, 芳賀 馨採集・保管.

この個体は林道路面の地面の地表に静止していたもので, そのすぐそばには自動車に轢かれたと思われる大破したオオスズメバチ *Vespa mandarinia japonica* RADOSZKOWSKI の死体があった (時刻は 18 時ころで, 採集地点は広葉樹二次林の樹冠が閉塞して薄暗く, スズメバチが目について初めてハネカクシにも気付いた). ハネカクシは頭をスズメバチに向け, 両者の距離は約 1 cm に近づいていた. しかしハネカクシの体はスズメバチに接触してはならず, ハネカクシがスズメバチを摂食しているとは認められなかった.

WATANABE (1990) によると, ナミクシヒゲハネカクシは, 欧州においてしばしば *Vespa* 属の種の巣から発見され, 日本においてはツヤクロスズメバチ *Vespula schrenckii* とシダクロスズメバチ *Vespula shidai* の巣から発見された記録がある. 本種と同属のナガクシヒゲハネカクシ *Velleius elongatus* NAOMI は, オオスズメバチの巣から採集されたことがある. これらのことから, ナミクシヒゲハネカクシとオオスズメバチの間に何らかの生態的な結びつきがあっても不自然ではない. 今回の場合, オオスズメバチの外骨格が破壊されていたことから, その体内にある何らかの物質が強く放出され, それにナミクシヒゲハネカクシが誘引されていたという可能性も考えられるのではないだろうか.

参考文献

WATANABE, Y., 1990. A revision of the Japanese species of the genus *Velleius* (Coleoptera, Staphylinidae). *Elytra*, 18: 59-72.

山屋茂人・桜井 精, 2004. 湯沢町の昆虫目録. 湯沢町史. 双書 5. 資料. pp. 1-111. 湯沢町.

(埼玉県さいたま市, 芳賀 馨)

日本産ツツキノコムシ科検索図説 VIII^{注1}

——ツヤツツキノコムシ族② (ツヤツツキノコムシ属 (続き)), オモゴツツキノコムシ族 (オモゴツツキノコムシ属), コキクイツツキノコムシ族 (コキクイツツキノコムシ属)——

川 那 部 真

2-4-1. ツヤツツキノコムシ *Octotemnus laminifrons* (MOTSCHULSKY, 1860)

北隆館『原色昆虫大図鑑 II』p. 216, No. 29; 保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 35; KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 253 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.33~1.96 mm, 上翅幅 0.58~0.85 mm. 体の側縁は平行で細長い (TL/EW \geq 2.23). 背面の光沢が強く, 前胸は大きく方形に近い (PL/PW=0.87~1.0). 前脚脛節は外縁に沿って 10 本以上の棘を具える. ♂の大あごは巨大で, 頭楯には一對のひさし状突起がある. 最普通種. 分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬, 伊豆諸島, 南西諸島. 寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, ヤキフタケ, オオチリメンタケ, クジラタケ, ミダレアミタケ, カイガラタケ, ヒイロタケ, チャミダレアミタケ, ミイロアミタケ, アズマタケ, ホウロクタケ.

2-4-2. フツツツツキノコムシ *Octotemnus robustus* KAWANABE, 2002

KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 258.

体長 1.82~2.21 mm, 上翅幅 0.88~1.02 mm. 体は太短い (TL/EW \leq 2.16). 前脚脛節外縁の棘は 9 本以下. 上翅の点刻はへそ状で大きく, 前胸背板の点刻より明らかに大きい. ♂の大あごはあまり大きくなく, 上に向けたツノ状突起を具える. 少ない. 分布: 対馬. 寄主菌: カワラタケ.

2-4-3. カタキバツツツキノコムシ *Octotemnus japonicus* MIYATAKE, 1954 (和名改称)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 284, No. 36; KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 257 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.04~1.29 mm, 上翅幅 0.48~0.58 mm. ♂の左大あごは非常に大きな棘状の突起を具え, 右大あごに比べて大きく見える. ♀はツヤツツキノコムシの♀に酷似するが, はるかに小さい. 各地に普通. 分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬, 伊豆諸島, 南西諸島. 寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, オオチリメンタケ, クジラタケ, ミダレアミタケ, ヒイロタケ, チャミダレアミタケ, ツヤウチワタケ.

2-4-4. トゲキバツツツキノコムシ *Octotemnus aculeatus* KAWANABE, 2002

KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 263.

体長 1.05~1.17 mm, 上翅幅 0.48~0.53 mm. ♂の各大あご上面には小さく曲がった小突起を具える. 本種と前 3 種は背面に光沢があり似ているが, 前胸背板の点刻が 2 種類からなるのは本種だけである. 少ない. 分布: 南西諸島. 寄主菌: ホウロクタケ.

2-4-5. アラゲカタキバツツツキノコムシ *Octotemnus punctidorsum* MIYATAKE, 1954 (和名改称)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 285, No. 36; KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 253 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.54~2.0 mm, 上翅幅 0.78~0.99 mm. 体は長卵形, 背面は非常に明瞭な点刻と被毛を装う. 前胸背板の点刻は大きく明瞭で, 小楯板の横の長さの 0.1 倍以上. ♂の左大あごには巨大棘状突起があり 3 歯状. 本種以下オオツツツキノコムシまでは, 体が長卵形で背面に光沢を欠く点で外見が似ている. 少ない. 分布: 本州, 四国, 九州. 寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, カイガラタケ.

2-4-6. ヒメツツツツキノコムシ *Octotemnus parvulus* MIYATAKE, 1954

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 285, No. 36; KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 248 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.02~1.24 mm, 上翅幅 0.48~0.6 mm. オモゴツツツキノコムシとオオツツツツキノコムシに酷似するが, 体が小さいことで区別できる. 各地に普通. 分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 南西諸島. 寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, チャミダレアミタケ, カイガラタケ, オオチリメンタケ.

^{注1} Makoto KAWANABE: An illustrated guide to identification of ciid beetles of Japan, VIII.

2-4-7. マユナガツヤツツキノコムシ *Octotemnus pilosoceps* KAWANABE, 2002

KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 249.

体長 1.5~1.82 mm, 上翅幅 0.67~0.78 mm. 上翅が相対的に長く (EL/PL \geq 1.83, EL/EW \geq 1.42), 体は細長い. ♂の頭頂には小さいが明瞭な一対のこぶ状突起を具え, 各突起の先端には数本の非常に長い毛を装うため眉状に見える. 分布: 屋久島. 寄主菌: カワラタケ.

2-4-8. オモゴツヤツツキノコムシ *Octotemnus omogensis* MIYATAKE, 1954

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p.285, No. 37; KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 247 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.31~1.73 mm, 上翅幅 0.62~0.83 mm. 前胸背板の点刻は大きく密で, 点刻間の距離は点刻直径の0.5~2倍. 触角第3節は第4節の1.6倍. ♂は, 腹部腹板第1節に腹孔をもつこと以外に二次性徴がなく, 外見は♀が類似する. 本州中部以西の標高が比較的高い地域に普通. 分布: 本州, 四国, 九州. 寄主菌: カワラタケ, ヤキフタケ, オオチリメンタケ.

2-4-9. オオツヤツツキノコムシ *Octotemnus glabriculus* (GYLLENHAL, 1827)

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 285, No. 37; KAWANABE, 2002, Jpn. J. syst. Ent., 8: 246 [再記載, ♂交尾器他].

体長 1.31~1.84 mm, 上翅幅 0.62~0.85 mm. オモゴツヤツツキノコムシに酷似するが, 前胸背板の点刻は小さく疎で, 点刻間の距離は点刻直径の1~4倍. 触角第3節は第4節の2倍. 本州中部以北の標高が比較的高い地域に普通. 前胸背板の点刻の状態には変異があり, 前種とあわせて再検討を要する. 分布: 北海道, 本州; ユーラシア. 寄主菌: カワラタケ, ヤキフタケ, アラゲカワラタケ, チャミダレアミタケ, オオチリメンタケ.

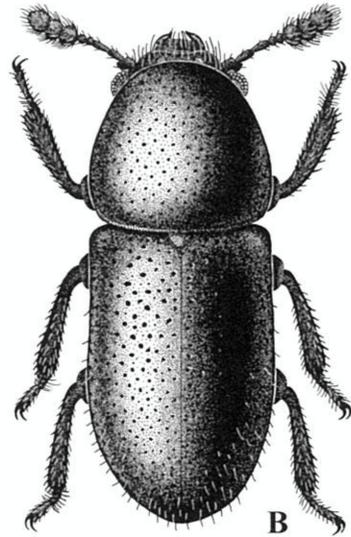
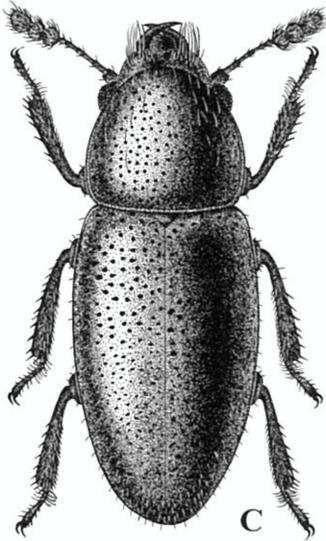
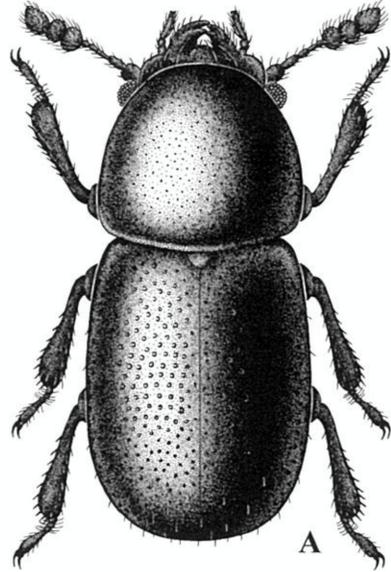


図1. ツヤツツキノコムシ属3種—A, フトツヤツツキノコムシ *O. robustus*; B, トゲキバツツツキノコムシ *O. aculeatus*; C, マユナガツツツキノコムシ *O. pilosoceps* (いずれも KAWANABE, 2002 より).

3. オモゴツツキノコムシ族 (仮称)

これまでに取りあげたツツキノコムシ族やツヤツツキノコムシ族とは、形態的にかなり異なる。触角球桿は大きくかたく接続する、下唇ひげは下唇前基節の中間付近に付き下唇ひげ末端節は広がる、中・後脚腿節の背面に剛毛列を具える、♂第9腹板はY型、など次のコキクイツツキノコムシ族と共通の特徴が多く認められる。しかし下唇は2節からなり、前脚基節は横に長い、オモゴツツキノコムシ属のほかに、セイシェル諸島に分布する *Tropicis* 属などが含まれると考えられるが、正式には記載されておらず、ここではオモゴツツキノコムシ族 (仮称) としておく。

3-1. オモゴツツキノコムシ属 *Syncosmetus* SHARP, 1891

前脚腿節の先端外縁はまるまり数本の小棘を装う、体表の点刻はへそ状、後翅を欠く、などの特徴を具える。♂の腹部腹板には腹孔がある。SHARPは本属がホソカタムシ科に属すると考えていたほど、一見してツツキノコムシ科の他のグループとは異なった外見をしている。現時点では、日本から下記の2種が知られるだけであるが、東南アジアなどには複数の未記載種がある。*Omogocis* MIYATAKE, 1954は本属のシノニム。

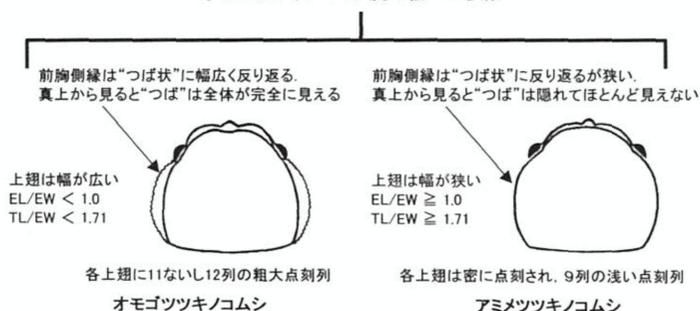
種への検索

1. 前胸側縁の反り返りは幅が広く鋸歯状の“つば”を形成する。上から見ると、この“つば”は全体が完全に見える。上翅は相対的に幅広く、通常EL/EWは1.0未満、TL/EWは1.71未満。各上翅には11ないし12列の粗大点刻列がある。.....オモゴツツキノコムシ
- 前胸側縁は“つば状”に反り返るが幅が狭い。上から見ると、この“つば”は隠れてほとんど見えない。上翅は相対的に細く、通常EL/EWは1.0以上、TL/EWは1.71以上。各上翅は密に点刻され9列の浅い点刻列がある。.....アミメツツキノコムシ

3-1-1. オモゴツツキノコムシ *Syncosmetus japonicus* SHARP, 1891

北隆館『原色昆虫大図鑑II』p. 216, No. 17; 保育社『原色日本甲虫図鑑III』p. 280, No. 1.
 体長1.45~1.91 mm, 上翅幅0.94~1.15 mm. 前胸背板にはへそ状点刻を密に装い、正中線に沿って浅い溝がある。各上翅には11ないし12の粗大点刻列があり、上翅会合線と第1・3・5・7・9(または10)間室は強く隆起する。腹部腹板にもへそ状点刻を密に装う。頭頂には中央に小さなこぶ状隆起がある。*Omogocis tuberculifrons* MIYATAKE, 1954は本種のシノニム。ブナ帯などを中心に生息し、あまり多くはない。分布: 本州、四国、九州。寄主菌: ツリガネタケ、コフキサルノコシカケ、ツヤナシマンネンタケ、カワウソタケ。落ち葉中から採集されることもある。

オモゴツツキノコムシ属の種への検索



3-1-2. アミメツツキノコムシ *Syncosmetus reticulatus* MIYATAKE, 1985

保育社『原色日本甲虫図鑑III』p. 280, No. 2.
 体長1.36~1.98 mm, 上翅幅0.78~1.13 mm. 前胸背板にはへそ状点刻を密に装い、正中線に沿って浅い溝がある。しかしオモゴツツキノコムシのように、前胸側縁の“つば”は広がらない。各上翅は密に点刻され9列の浅い点刻列があるが、顕著な隆起線を欠く。ブナ帯などを中心に生息し、あまり多くはない。分布: 本州、四国、九州。寄主菌: ツリガネタケ、コフキサルノコシカケ。

4. コキクイツツキノコムシ族 *Xylographellini*

触角球桿は大きくかたく接続する、下唇ひげは下唇前基節の中間付近に付き下唇ひげ末端節は広がる、中・

後脚腿節の背面に剛毛列を具える, ♂第9腹板はY型, などオモゴツツキノコムシ族との共通の特徴が存在するが, 下唇は3節からなり, 前脚基節は突出した円錐形. コキクイツツキノコムシ属のほかに, サモアに分布する *Scolytocis* 属が含まれると考えられる.

4-1. コキクイツツキノコムシ属 *Xylographella* MIYATAKE, 1985

前脚腿節の先端外縁はまるまり数本の小棘を装う, 前胸腹板は短く横にくぼむ, 前胸突起は薄片状, などの特徴を具える. ♂の腹部腹板には腹孔を欠き, 外見では♂♀の区別ができない. 後翅はよく発達する. 現時点では日本から下記の1種が知られるだけである.

4-1-1. コキクイツツキノコムシ *Xylographella punctata* MIYATAKE, 1985

保育社『原色日本甲虫図鑑 III』p. 280, No. 4; KAWANABE & MIYATAKE, 1996, *Elytra*, 24: 127 [再記載].

体長 1.36~1.65 mm, 上翅幅 0.7~0.82 mm. 前胸背板にはへそ状点刻を密に装い, 点刻と点刻の間は網目状印刻で被われる. 上翅は上から見ると亜方形に近く, 前胸背板の点刻よりも少し小さなへそ状点刻を装う. ♂♀ともに, 頭楯の両側がわずかに広がる. 外見では♂♀の区別ができない. 見た目はククイムシの仲間に似る. 山地のブナやミズナラなどの林を中心に生息し, あまり多くはない. 分布: 本州, 四国. 寄主菌: ツリガネタケ.

謝 辞

この連載を行うにあたり, 多くの方々のご指導とご協力をいただいた. また鈴木瓦氏には, 手間のかかる編集の労をとっていただいた. お世話になったすべての方に心から厚くお礼申し上げます.

おわりに

これまで合計8回, 2年間にわたって日本産ツツキノコムシ科の解説をさせていただいた. 既存の図鑑などとあわせてご使用いただくことで, 種レベルまで同定できるものが増えたのではないだろうか. しかし, 国内に限っても未記載種や検討が必要な種がまだまだ残っているのも事実である. 今後はこれらの整理を行うとともに, 検索図の改良を進め, まとまったところで再び解説をさせていただくつもりである.

日本産ツツキノコムシ科に関するおもな文献類

図鑑・モノグラフ

- 中條道夫, 1939. 筒蕈蟲科 (昆蟲綱-鞘翅群). 日本動物分類第10巻第8編第13号. 63 pp. 三省堂, 東京.
- LAWRENCE, J. F., 1971. Revision of the North American Ciidae (Coleoptera). *Bull. Mus. comp. Zool.*, 142: 419-522. [北米のモノグラフであるが, 日本産の種についても述べられている.]
- 宮武睦夫, 1985. ツツキノコムシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之 (編著), 原色日本甲虫図鑑, 3: 279-285 [図版 46]. 保育社, 大阪. [本連載の本文では, 保育社『原色日本甲虫図鑑 III』と表記.]
- 中根猛彦, 1963. ツツキノコムシ科. 中根猛彦・大林一夫・野村鎮・黒沢良彦 (共著), 原色昆虫大圖鑑, 2: 216 [図版 108]. 北隆館, 東京. [本連載の本文では, 北隆館『原色昆虫大圖鑑 II』と表記.]

解説記事

- 川那部真, 1992. ツツキノコムシ-サルノコシカケ内の超繁栄者. 昆虫と自然, 27(13): 15-20.
- 川那部真, 1998. サルノコシカケの中にすむツツキノコムシの世界. インセクタリウム, 35: 22-29.
- 川那部真, 1999. サルノコシカケとツツキノコムシ科甲虫類. 昆虫と自然, 34(5): 26-30.
- 川那部真, 2002. ツツキノコムシ学への招待. 昆虫と自然, 37(13): 28-31.
- 木下哲也, 1976. キノコに寄生するツツキノコムシ類. *Nature Study*, (22): 126-129.

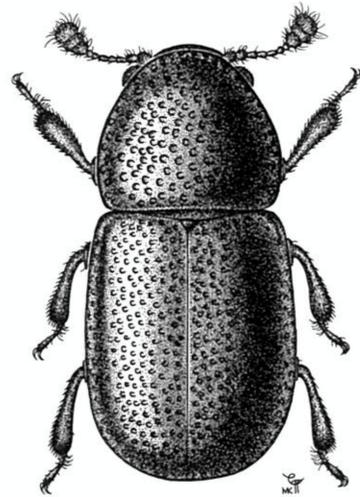


図2. コキクイツツキノコムシ *X. punctata* (KAWANABE & MIYATAKE, 1996 より).

原 記 載

- CHŪJŌ, M., 1939. On the Japanese Ciidae (Coleoptera). *Mushi, Fukuoka*, **12**: 1-10.
- CHŪJŌ, M., 1940. Description of a new and a rare species of the Japanese ciid-beetles. *Ins. Matsum.*, Sapporo, **14**: 132-133.
- CHŪJŌ, M., 1941. Description of a new ciid-beetle from Japan. *Kontyū, Tokyo*, **15**: 85-86.
- GYLLENHAL, L., 1813. *Insecta Svecica. Classis I. Coleoptera sive Eleuterata. Tomus I. Pars III.* Leverentz, Scaris, 730 pp.
- GYLLENHAL, L., 1827. *Insecta Svecica. Classis I. Coleoptera sive Eleuterata. Tomus I. Pars IV.* Fleischer, Leipzig, 761 pp.
- KAWANABE, M., 1993. A new genus of the family Ciidae from Yakushima Island, Southwest Japan. *Kontyū, Tokyo*, **61**: 763-769.
- KAWANABE, M., 1994a. A new genus and species of the family Ciidae from Southwest Japan. *Kontyū, Tokyo*, **62**: 186-192.
- KAWANABE, M., 1994b. A new species of the genus *Orthocis* CASEY (Coleoptera: Ciidae) from Japan. *Trans. Shikoku ent. Soc., Matsuyama*, **20**: 187-190.
- KAWANABE, M., 1994c. Notes on the genus *Neoenearthron* (Coleoptera, Ciidae), with description of a new species from Luzon Island, the Philippines. *Kontyū, Tokyo*, **62**: 641-650.
- KAWANABE, M., 1995. Taxonomic notes on the genus *Nipponapterocis* (Coleoptera, Ciidae), with descriptions of two new species from Japan. *Elytra, Tokyo*, **23**: 167-175.
- KAWANABE, M., 1996a. A new species of the genus *Ennearthron* (Coleoptera, Ciidae), from Hokkaido, Japan. *Jpn. J. sys. Ent., Matsuyama*, **2**: 105-108.
- KAWANABE, M., 1996b. A new genus of the family Ciidae (Coleoptera), with description of a new species from the Ryukyu Islands, Southwest Japan. *Elytra, Tokyo*, **24**: 331-336.
- KAWANABE, M., 1997a. A taxonomic study on the Japanese species of the genus *Sulcaxis* (Coleoptera, Ciidae). *Elytra, Tokyo*, **25**: 67-78.
- KAWANABE, M., 1997b. The Japanese species related to the group of *Cis nitidus* (Coleoptera, Ciidae). *Elytra, Tokyo*, **25**: 311-331.
- KAWANABE, M., 2001. A new ciid beetle of the genus *Cis* from Hokkaido, Japan (Coleoptera: Ciidae). *Spec. Publ. Japan Coleopt. Soc., Osaka*, (1): 267-270.
- KAWANABE, M., 2002. A revision of the genus *Octotemnus* (Coleoptera, Ciidae) from Japan. *Jpn. J. sys. Ent., Matsuyama*, **8**: 243-267.
- KAWANABE, M. & M. Miyatake, 1996. A redescription of *Xylographella punctata* MIYATAKE, 1985 (Coleoptera, Ciidae), with description of a new tribe. *Elytra, Tokyo*, **24**: 125-130.
- KIESENWETTER, H. VON, 1879. Coleoptera Japoniae collecta a Domino LEWIS et aliis. *Dtsch. ent. Z.*, **23**: 305-320.
- LESNE, P., 1917. Notes sur divers Cisides (Col. Ciidae). *Bull. Soc. ent. Fr.* [1917], 190-192.
- MIYATAKE, M., 1954. Studies on the Japanese Ciidae, I. (Coleoptera). *Sci. Rep. Matsuyama agr. Coll., Matsuyama*, **14**: 40-67, pls. 1-11.
- MIYATAKE, M., 1955. Notes on some Japanese Ciidae (Coleoptera). *Trans. Shikoku ent. Soc., Matsuyama*, **4**: 9-10.
- MIYATAKE, M., 1959. The Ciidae of Amami-Oshima (Studies on the Japanese Ciidae, II), *Mem. Ehime Univ.*, Sect. 6 (Agric.), **4**: 119-124.
- MOTSCHULSKY, V., 1860. Entomologie speciale. Insectes du Japon. *Etudes Ent.*, **9**: 4-39.
- NAKANE, T. & A. NOBUCHI, 1954. On a new genus and six new species of ciid-beetles from Japan (Ciidae, Coleoptera). *Sci. Rept. Saikyo Univ.*, (Nat. Sci.), (A), **2**: 47-52.
- NAKANE, T. & A. NOBUCHI, 1956. Entomological result from the scientific survey of the Tokara Islands. II Coleoptera: Ciidae. *Sci. Rep. Saikyo Univ.*, (Nat. Sci.), (A), **2**: 55-56.
- NOBUCHI, A., 1955a. Studies on the ciid-beetles from Japan (I), with descriptions of a new genus and some new species (Ciidae, Coleoptera). *Ent. Rev. Japan*, **6**: 53-58, pl. 12.
- NOBUCHI, A., 1955b. Studies on the ciid-beetles from Japan (II). *Akitu, Kyoto*, **4**: 105.
- NOBUCHI, A., 1959. Two new species of ciid-beetles. *Ent. Rev. Japan*, **10**: 51-52.
- NOBUCHI, A., 1960a. Ciidae from Hokkaido (Coleoptera). *Ent. Rev. Japan*, **11**: 37-41.
- NOBUCHI, A., 1960b. On a new species of *Cis* LATREILLE from Japan (Coleoptera, Ciidae). *Akitu, Kyoto*, **9**: 65-66.
- NOBUCHI, A. & Y. Wada, 1956. A new species of Japanese *Xylographus* (Ciidae, Coleoptera). *Ent. Rev. Japan*, **7**: 35-36.
- REITTER, E., 1877. Beiträge zur Käferfauna von Japan. *Dtsch. ent. Z.*, **21**: 369-383.
- REITTER, E., 1878. Neue Cioidae. *Mitt. Münchener Ent.*, **2**: 32-37.
- SHARP, D., 1891. Descriptions of two new species and a new genus of Japanese Coleoptera. *Entomologist*, **24**: 6-7.

(株)人と自然の環境研究所

○対馬のブドウトラカミキリ

新里達也・足立一夫

ブドウトラカミキリ *Xylotrechus pyrrhoderus pyrrhoderus* BATES は、国内では本州、四国、九州、佐渡、対馬、伊豆大島、宮島、見島、国外では朝鮮半島と中国東部に分布する(草間・高桑, 1984; 横原・斉藤, 1987)。また、前・中胸腹板が黒色を呈する(基亜種は赤色)別亜種 *nigrosternus* GRESSITT が、中国南部から知られている(GRESSITT, 1951)。

本種の対馬の記録は足立(1974)の1例に基づくものであるが、林(1984)、草間・高桑(1984)および新里(1992)の図鑑・図説では、本種の分布地として対馬を引用していない。さらに、その後に本種が対馬から再発見されていないこともあり、分布地としての対馬は半ば忘れ去られた状態にある。

本報では、分布地として対馬の再認知を促すとともに、当時得られた個体の特異な上翅斑紋の形状について紹介をしておきたい。

検視標本: 1♂, 長崎県対馬市峰町大星山, 29-VII-1973, 足立一夫採集(保管)。伐採地にあったエビヅル類の叩き網により採集した。

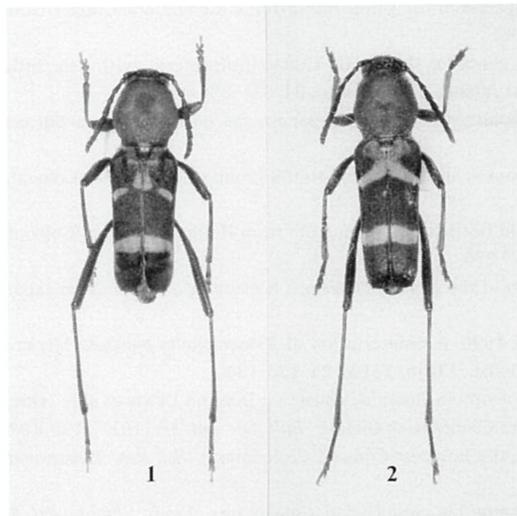


図1-2. ブドウトラカミキリ *Xylotrechus pyrrhoderus pyrrhoderus* BATES. — 1, 対馬大星山産; 2, 埼玉県産(通常個体)。

写真に示すように、この対馬産の標本は通常個体と比べてやや変わった上翅白紋を備えている。比較のために示した本州産の個体を見てもわかるように、本個体の上翅基部の斜白帯は中央で分断され、会合部小盾板後方の円紋、外方の小斜紋として認められる。トラカミキリの上翅斑紋の変異様式から、このような異常斑紋個体の出現は予想されるが、少なくとも本種に関しては、今までに報告のない斑紋例である。本個体はまた幅広い前胸と上翅をもつことで、通常の個体と異なった印象を受けるが、そのほかの形態的特徴は、ブドウトラカミキリ基亜種のものと同様一致する。

引用文献

- 足立一夫, 1974. 1973年対馬北部カミキリ紀行. 北九州の昆虫, 20(1): 17-27.
 GRESSITT, J. L., 1951. Longicorn Beetles of China. *Longicornia*, 2: 1-667. 22 pls.
 林 匡夫, 1984. カミキリムシ科. 林匡夫他(編): 原色日本甲虫図鑑, 4: 1-146 [incl. 28 pls.].
 横原 寛・斉藤秀生, 1987. 極東アジアの中の対馬のカミキリムシ相. 対馬の自然, pp. 187-227, pls.
 草間慶一・高桑正敏, 1984. カミキリ亜科. 日本鞘翅目学会(編): 日本産カミキリ大図鑑, pp. 249-351, pls. 28-48. 講談社, 東京.
 新里達也, 1992. カミキリ亜科. 大林延夫他(編): 日本産カミキリムシ検索図説, pp. 117-146, 467-534.

(新里: 東京都国分寺市; 足立: 福岡県福岡市)

四国産エグリマメコメツキの形態について

大平仁夫・白石正人

Notes on some structures of *Yukoana angustata* (Coleoptera: Elateridae, Negastriinae) from Ehime Prefec., Shikoku, Japan

Hitoo ÔHIRA and Masato SHIRAISHI

Abstract: *Quasimus angustatus* was originally described by MIWA (1927) on the basis of a single male specimen collected from Mt. Sasa-yama in Ehime Prefecture, Shikoku, Japan. Recently, we had an opportunity to examine one female specimen of this species from Mt. Kame-ga-mori in Ehime Prefecture. As the result of the study, we concluded this species should be transferred to the genus *Yukoana* KISHII, 1959.

エグリマメコメツキは、MIWA (1927) が愛媛県の篠山 (ササ山) (標高 1,065 m) で松村松年により採集 (21-VII-1916) された体長 2.2 mm の黒色をした 1 頭の雄に基づいて、新種として記載した種である。産地名は原記載では「Mt. Sasa in Ehime District」としてあり、MIWA (1934) では「Sasayama in Iyo」としている。

本種が原記載以降に記載されたのは的場・平松 (1973) による和歌山県大塔山から 1972 年 5 月 4 日に的場が採集した 1 個体である。しかし、この個体の雌雄や同定のいきさつなどは不明である。また、和名は原記載ではエグリチビコメツキとしているが、的場・平松 (1973) ではエグリマメコメツキとして記録しており、その

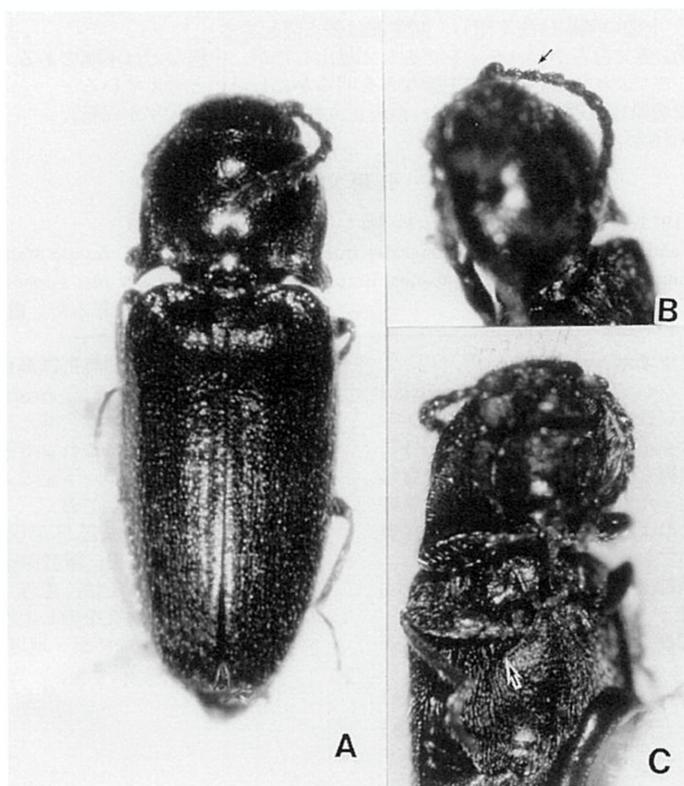


Fig. 1. A-C. Some structures of female of *Y. angustata*.

A, body length 2.5 mm; B, some basal segments of right antenna; C, right metasternal carinae (↑).

後はこの和名が使用されている。

筆者の一人である白石は、愛媛県と高知県との県境にある瓶ヶ森(標高1,897 m)において、原記載によく一致する1雌を採集した。本種は原記載以降 *Quasimus* 属の種として扱われてきたが、触角や上翅の特徴から判断すると、*Yukoana* 属(これら両属が別属か同属かの問題はここでは扱わない)に含まれる種であると判断されるので、ここではこの属名で扱った。

***Yukoana angustata* (MIWA, 1927), comb. nov. エグリマメコメツキ (Fig. 1, A-C)**

Quasimus angustatus: MIWA, 1927, *Insecta Matsum.*, 2(2): 107, fig. 3. (Mt. Sasa-yama in Shikoku).

Quasimus angustatus: MIWA, 1934, *Dept. Agr. Gov. Res. Inst. Formosa*, (65): 92, pl. III, fig. 18. (Sasayama in Iyo).

Quasimus angustatus: 的場・平松, 1973, *南紀生物*, 15(2): 47. (大塔山).

原記載で示された雄の体は細長くて両側は平行状。黒色で金属光沢(metallic lustre)を有し、短い黒色毛を生じる。触角は黒色で肢は黄褐色(testaceous)である。また、頭部は複眼間には凹状部(foevolate)が見られる。前胸背板の後角部はやや後外方にとがり、各背面の隆起腺は側縁に沿って前胸背板の中央部付近まで達する。上翅にはかすかに条線が見られる。

このたび検した雌個体は、原記載以降での最初の記録である。体長は2.5 mmほどで細長く、両側は平行状である(Fig. 1, A)。黒色でややピッチ色の光沢を有するが、原記載にあるような metallic lustre は有しない。触角は黒色で肢の腿節は黒褐色であるが、脛節とふ節は暗黄褐色である。

頭部はやや粗雑点刻を分布し、前頭部の中央部は縦隆線を有し、頭頂部には浅い円形状の窪みが見られる。触角は短く、末端は前胸背板の後角には達しない。第2節は短小で幅よりやや長く、第3節は弱い倒円錐状で第2節よりやや長く、第4節から鋸歯状を呈する(Fig. 1, B)。前胸背板は膨隆し、両側は中央部で外方に湾曲、後角前で内方に湾曲し、後角は後外方にとがる。また、後角背面の隆起腺は明瞭で、側縁に沿って中央やや前まで達する。小盾板のリング状の段刻は楕円形状である。後胸腹板線は三角形状を呈し、末端は合流してとがる(Fig. 1, C)。上翅の条線は浅く印し、間室部は弱く隆起する。

本種は瓶ヶ森の登山道で白石がビーティングをして見出したが、生態などは不明である。こんごより多くの雌雄個体を得たうえで、より詳しい形態や生態などを明らかにしたいと考えている。

調査標本: 1♀, 愛媛県瓶ヶ森, 23-V-2004, 白石正人採集。(標本は大平が保管)。

分布: 本州(和歌山県), 四国(愛媛県)。

引用文献

的場 績・平松広吉, 1973. 和歌山県産コメツキムシ科目録 I. *南紀生物*, 15(2): 45-48.

MIWA, Y., 1927. New and some rare species of Elateridae from the Japanese Empire. *Insecta Matsum.*, 2(2): 105-114.

MIWA, Y., 1934, The fauna of Elateridae in the Japanese Empire. *Dept. Agric. Gov. Res. Inst. Formosa*, (65): 289 pp., 9 pls. (大平: 岡崎市舞木町; 白石: 今治市米屋町)

○佐賀県初記録のミツオホシハナノミ

ミツオホシハナノミ *Hoshihananomia mitsuoi* NAKANE et NOMURA は九州と本州中・西南部から知られる。九州ではタイブ産地の福岡県若杉山はじめ同県福智山などで得られているにすぎず、佐賀県ではまだ記録がなかったと思われる。しかし、筆者らの1人、高橋は次のように佐賀県内で本種を採集しているのを報告しておきたい。

1♀, 佐賀県西松浦郡西有田町大木, 14. VII. 2004, 高橋採集, 高桑保管。

有田川の堤防(標高30~40 m)にて草の葉上より発見した。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)
(佐賀県佐賀市, 高橋隆信)

○キラホシハナノミの与那国島からの記録

キラホシハナノミ *Hoshihananomia kirai* NAKANE et NOMURA は台湾と八重山諸島から知られる。八重山諸島ではこれまで西表島と石垣島からのみ記録されていたが、下記のように与那国島でも採集されたので報告しておく。

2♀, 沖縄県与那国島与那国潮原付近, 21. V. 2003, 焼田理一郎採集, 筆者保管。

いつも貴重な標本を快く恵与くださる那覇市在住の焼田理一郎氏にお礼を申し上げる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

翅が短縮するコクロオバボタル雌成虫の追加知見

川島逸郎・高井 泰

Additional notes on brachypterous adult female of *Lucidina okadai*
NAKANE et OHBAYASHI, 1949 (Coleoptera, Lampyridae, Lampyrinae)

Itsuro KAWASHIMA and Yasushi TAKAI

はじめに

本州中部のごくわずかな生息地が知られるのみとなっている、ホタル科マドボタル亜科 (Lampyridae, Lampyrinae) に属するコクロオバボタル *Lucidina okadai* 雌成虫の外部形態は、KAWASHIMA & TAKAI (2004) によって初めて詳細に記載された。その際に判明したもっとも重要かつ特異な形質は、上翅および後翅が二次的な退化を生じ、かなり短縮化している点である。この報告により、これまで実態が不確定のまま残されていた柳原 (1923a, b) のコバネボタル (小翅螢) は、中根・大場 (1981) や大場他 (1996) でも触れられているように、本種を指すことにほぼ間違いのないことを追認する結果となった。上・後翅の短縮という、オバボタル属としては異例な特徴については、柳原の二つの報文でも明確に記述されているが、残念ながらコバネボタルはその後、オバボタル *L. biplagiata* (MOTSCHULSKY, 1866) 奇形個体の誤認として扱われてきた経緯がある (岡田, 1931; 神田, 1934; 1935)。この短翅の雌成虫について、KAWASHIMA & TAKAI (2004) は、その外観から、飛翔はまず不可能であろうと想定した。その後、わずかな材料数かつ大枠ではあるものの雌成虫の解剖を行った結果、若干ながら追加知見を得たので、今回ひとまず簡単に公表する。

なお、本種は現在、日本産ホタル科の中でも最も絶滅が危惧される種の一つと思われることに加え、飛翔せず草むらの地表付近にいと推定される雌成虫を野外で発見することは至難である。従って、今後多数の材料を費やした上での詳細な調査はますます困難となることが想定されるが、機会が得られれば追加研究を行いたいと考えている。

材料および方法

すべての標本は岐阜県産のものを用いた。雌標本は計5個体を用い、比較に用いた雄も含め、乾燥および95%エチルアルコールで固定・浸漬保存された標本を併せて使用した。さらに、新たに飼育羽化させた新成虫は、酢酸エチルで殺した直後に、生理食塩水に浅く浸した状態で解剖した。外骨格・体幹の観察にあたっては、それらを5~10%に希釈した水酸化ナトリウム溶液に1~2時間程度浸漬したのちに、蒸留水で洗浄して観察に用いた。解剖・観察は光学 (Olympus CH-2) および実体顕微鏡 (Olympus SHZ10) 下で行った。

結 果

飛翔筋の有無: 外部形態および外骨格は、KAWASHIMA & TAKAI (2004) でも部分的に記載・図示されているように、雌成虫においても、中・後胸での状況は、翅の基部節片を含めて雄と同様にほぼ完全であった。しかし、胸部内壁の内突起等の発達も弱く、個体によっては、それらがほとんど消失しているような例もみられた。さらに、きわめて重要かつ注目に値する点は、中・後胸ともに飛翔筋がほぼ完全に消失していたことであった。本種の雄や、よく飛翔する他の種では飛翔筋で充満しているべき部位は、ほぼ透明に近い液体 (組織液と呼んでよいと思われる) で満たされているのみであった。飛翔筋は、羽化後日数を経過した成熟個体において観察されないだけでなく、羽化直後の新成虫においても、すでに退化・消失していることを確認した。こうした飛翔筋の退化・消失は、翅の基部構造および外表皮自体は正常に完成していることからみても二次的なものと推測されるが、その退化過程が、個体発生のいずれの段階で開始され、またそれがいつまでに完了するのかは、現状ではまったく不明である。ただし、このような状況から、本種の雌成虫が飛翔することはまず不可能であると考えられる。ちなみに、日中に活発に飛翔する本種の雄では、当然ではあるが飛翔筋はよく発達している。

産卵数: 本種に関する記述とみなされる柳原 (1923a, b) によれば、1個体当りの産卵数は「35~45粒」あるいは「30粒」と述べられている。筆者の一人、川島の観察では、わずかな個体数での調査ではあるが、羽化直後の時点ですでに卵巢内に20~40個内外の未成熟卵を持っていることが観察された。ただし、明瞭な卵形態を成していないものも数個 (5, 6個内外) はみられたものの、明確な判別ができなかったために、数に入れていない。また、虫体サイズ自体の個体変異幅も大きく、大形の個体ほど、より多くの卵を持つようであったが、この点についても調査は不十分のまま残されている。しかし、この度の調査にみる限りにおいては、柳原

(1923a, b)による報告はおおむね妥当と判断してよいと思われる。産卵数または蔵卵数が20~40個内外という数は、日本産ホタル科の中でも少ない部類に入るが、同属のオバボタル *L. biplagiata* においてもほぼ同様の数(川島, 未発表)であり、この属では普遍的なものであるのかもしれない。

引用文献

- 神田左京, 1934. ホタルの名. 植物及動物, 2(12): 75-78.
 ———, 1935. ホタル. 発光生物研究会刊, 496 pp.+20 pls., 丸善, 東京.
 KAWASHIMA, I. & Y. TAKAI, 2004. Immature stages and adult female of the lampyrine species, *Lucidina okadai* NAKANE et OHBAYASHI, 1949 (Coleoptera, Lampyridae, Lampyrinae) from Gifu, central Honshu, Japan. *Elytra, Tokyo*, 32: 153-170.
 中根猛彦・大場信義, 1981. ホタルの観察と飼育. v+122 pp., ニュー・サイエンス社, 東京.
 大場信義・高井泰・後藤好正・川島逸郎, 1996. コクロオバボタル雄成虫の外部形態・習性および生息環境. 横須賀市博研報(自然), (44): 33-45.
 岡田 要, 1931. 本邦産蛭類学名の考察. 動物学雑誌, 43: 130-149.
 柳原政之, 1923a. 面白い虫の新種. サンデー毎日, p. 18. (発刊日: 大正12年7月15日)
 ———, 1923b. 蛭の一種の観察. 昆虫世界, 27: 368-370, pl. 6.

(川島: 神奈川県横須賀市)

(高井: 岐阜県高山市)

○石川県におけるクロアリツカエンマムシの採集事例

クロアリツカエンマムシ *Hetaerius optatus* LEWIS は全国的にも採集事例が少なく、珍しい種のようなのである(大原, 1997)。筆者は、石川県において本種を採集しているのここに報告する。

1ex., 石川県能美郡辰口町鍋谷蟹淵, 20. VI. 2004. 筆者採集。

採集場所である蟹淵とは、梯川の支流である鍋谷川上流の標高約270mの地点にある野池の名称で、ルリイトトンボやモリアオガエルが見られるなど周囲の自然環境はとても豊かである。この蟹淵のすぐ近くにある立ち枯れ木の枝をピーティングして、折れた枝の中から出てきた本個体を採集した。城戸(2000)はブナの立ち枯れの樹皮下から本種を得たことを報告しているが、筆者が採集した時点では残念ながら本種であると気付かず、樹種や折れた

枝がアリの営巣場所として利用されていたかどうかは不明である。

本種は好蟻性のエンマムシで、西川(1987)は本種の共棲宿主としてクロクサアリ *Lasius fuliginosus* (LATREILLE) を報告した。ところが MARUYAMA (2004) は、本種の確実な共棲宿主としてアシナガアリ *Aphaenogaster famelica* SMITH を挙げており、自身の詳細な調査結果から、クロクサアリの巣からの採集報告は偶然による可能性が高いことを示唆している。なお、石川県ではアシナガアリは記録されているがクロクサアリの記録はない(富樫, 1998)。

ところで、芳賀(1999)や城戸(2000)は背面に黄色長毛を持たず、短毛すら欠いている個体を採集しているが、今回筆者の得た個体は黄色長毛と短毛を備えており、点刻の状態は大原(1997)の図示したものと同様であった。

末筆ではあるが、本種の記録や文献についていろいろと御教示いただいた、金沢市の高羽正治氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 芳賀 馨, 1999. クロアリツカエンマムシを福島県塙町で採集. 甲虫ニュース, (125): 12-13.
 城戸克也, 2000. 九州におけるクロアリツカエンマムシとコブナシコブスジコガネの記録. 甲虫ニュース, (132): 8.
 MARUYAMA, M., 2004. Symbiotic host of the myrmecophilous histerid beetle, *Hetaerius optatus* (Coleoptera, Histeridae, Hetaerinae). *Elytra*, 32: 326.
 西川正明, 1987. クロアリツカエンマムシをクロクサアリの巣から採集. 甲虫ニュース, (79/80): 12.
 大原昌宏, 1997. 日本産エンマムシ上科概説 VI. 甲虫ニュース, (119): 1-6.
 富樫一, 1998. ハチ目. 石川県の昆虫: 252-304. 石川県自然保護課.

(金沢市, 吉道俊一)



○伊豆諸島八丈島におけるクリイロアシトコメツキの記録

クリイロアシトコメツキは、奄美大島で採集された個体に基づいて Miwa (1934) により *Anchastus castaneus* という学名で命名記載された種である。その後、KISHII (1985) により *Castanus* 属に置かれたが、最近の大平 (2003) の研究では、*Podeonius* 属に置かれている。本種の分布については、原記載以降、徳之島、沖縄本島、石垣島、西表島などから記録がされ、琉球列島に広く分布することが明らかになっている (KISHII, 1999)。筆者らは、これまで記録のなかった伊豆諸島八丈島で採集された個体を検することができたのでここに報告しておく。

1 ex., 東京都八丈島中之郷裏見ノ滝温泉, 20. VIII. 2001, 川畑喜照採集; 1 ex., 同地, 12. IX. 2001, 川畑喜照採集; 1 ex., 同地, 17. VIII. 2003, 川畑喜照採集 (以上川畑氏保管); 2 exs., 八丈富士南東斜面, 26-28. VII. 2004, 小林邦彦・鈴木互採集 (写真: 鈴木保管)。なお、裏見の滝温泉の個体はいずれも外灯の周りのスイーピングにより採集されたもので、八丈富士の個体は、FIT により採集されたものである。



末筆ながら、採集データの提供と発表を許された八丈町の川畑喜照氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

KISHII, T. 1999. A check-list of the family Elateridae

from Japan (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (42): 1-144.
大平仁夫, 2003. 日本産アシトコメツキ類の属名について. 甲虫ニュース, (142): 19-21.

(東京都多摩市, 小林邦彦)
(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○北海道黒松内町からクロヒメゲンゴロウを記録

クロヒメゲンゴロウ *Ilybius anjae* NILSSON は国内では北海道だけに分布するが、分布が道東・道北に偏っている傾向があり (森・北山, 2002), これまでの本種の分布の西限は苫小牧市 (松本, 1993; 吉田ほか, 1995) および石狩市 (松井, 1997) であったが、筆者は本種を未記録であった後志管内黒松内町から採集していることで報告する。

2 exs., 北海道寿都郡黒松内町 (国土地理院標準地域メッシュ No. 6340-72-85). 19. VI. 2004.

歌オプナ林と朱太川にはさまれた湿地にある幅約 90 cm, 水深 5~15 cm (当時) の溝から得られた。

2 exs., 北海道寿都郡黒松内町東栄 (6340-73-53). 3. VII. 2004.

山麓にある小規模な湿原から得られた。
今回の記録により、黒松内町が道内における本種の分布の西限となった。

参考文献

松井英司, 1997. 北海道で採集した水生甲虫類. 北九州の昆虫, 44(1): 25-32.

松本英明, 1993. 北海道のゲンゴロウ採集. 昆虫と自然, 28(8): 8-13.

森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説・日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. pp. 130-132.

吉田国吉・岡崎克則・堀 繁久・村井雅之, 1995. 苫小牧および厚真地方のゲンゴロウ類. 苫小牧市博物館研究報告, (5): 1-8.

(北海道室蘭市, 山川雄大)

○神奈川県川崎市におけるトゲニセマグソコガネの採集例

トゲニセマグソコガネ *Caelius denticollis* LEWIS, 1895 は、本州に広く分布することが知られる種であるが、個体数はあまり多くないようである。神奈川県からは平野 (2004: 492) によると、横浜市、円海山、座間市谷戸山、伊勢原市大山、津久井町、鳥屋越路峠、南足柄氏大雄山、箱根宮ノ下、木質、神山などの採集記録があるが、平地において採集された例は少ないようである。筆者は川崎市の生田緑地公園で本種を採集する機会を得たので、分布資料として記録しておきたい。採集された個体は、公園事務所に許可を得て設置した FIT に入ったものである。

1 ex., 神奈川県川崎市多摩区生田緑地公園, 29. V. 2004, 筆者採集・保管。

引用文献

平野幸彦, 2004. 甲虫目 Coleoptera. 神奈川県昆虫誌, II: 335-835.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○センノカミキリがセイヨウキツタ(アイビー)を食害

昨年夏、町田市にある自宅と隣家との境のよう壁に伸長したセイヨウキツタの幹の中の本の葉が、1mほどの長さにわたって茶色に変色しているのに気が付いた。そして、そのよう壁の下に1頭(♂)のセンノカミキリ *Acalolepta luxuriosa* (BATES) が落ちているのを見つけた。センノカミキリは、これまでハリギリ、カクレミノ、ヤツデなどウコギ科の樹木を食害することが知られているので、同じ科に属するセイヨウキツタを加害したのもこの種の仕業と推測された。しかし、これまでこの種がセイヨウキツタを食害するとは寡聞にして知らず、また直接加害状況を実見した訳でもないで、セイヨウキツタへの加害がこの種によるものとは断定し得なかった。その後、8月15日に同じ場所で2♂、1♀の本種を見出し、さらに直径3cmほどの幹を食害している幼虫を発見した。そこで、この幼虫の種名同定を大林延夫博士に依頼したところ、予測通りセンノカミキリの幼虫であることが確かめられた。これによって、この種がセイヨウキツタの加害虫であることが立証されたので報告しておきたい。

末筆ながら幼虫の種名同定を煩わせた大林延夫博士に御礼申し上げる。

(東京都町田市、渡辺泰明)

日本鞘翅学会名簿 2005 に関するお詫びとお知らせ

「日本鞘翅学会会員名簿 2005」の発行に向け、昨年末の12月の甲虫ニュース前号発送時に、会員の皆様に対し、新名簿作成の案内と、記入シートによる掲載情報の提供を呼びかけたところです。その中で住所・電話番号・電子メールアドレスについては掲載の可否について答える項目となっていたものの、「生年月日」については、その可否を問う欄がないものでした。この件についてお問い合わせをいただきましたが、この「生年月日」の項目は、会員動静把握や名誉会員の推薦、日本学術会議への報告等、会務運営上の必要から、会の内部資料とするものとしてお尋ねしていた項目で、名簿に掲載する意図はありませんでした。案内文や記入シートからはそのことが読み取れるようにはなっておらず、皆様に無用の誤解を与えるような表現となっておりましたことをお詫び申し上げます。本件につきまして会員の皆様にご理解を賜りたく、お願い申し上げます。

なお、本名簿は次回甲虫ニュース発行時(6月の予定)にニュースに同封し、皆様のお手元にお届けできるよう準備中です。

(会長: 高桑正敏, 庶務担当幹事: 岸本年郎)

◇「日本鞘翅学会第18回大会」開催の予告◇

今年は下記のように中国地方で初めての大会開催を倉敷で計画しています。観光地でもありますし、お問い合わせのうえ、ご参加いただければと思いま

す。大会の詳細につきましては、6月ころにご案内できる予定です。

日時: 2005年11月19日(土)~20日(日)

会場: 岡山県倉敷市中央2-6-1

倉敷市立自然史博物館・倉敷市立美術館
問い合わせ先: 倉敷市立自然史博物館・奥島雄一
Tel. 086-425-6037

e-mail: musoku@city.kurashiki.okayama.jp

(日本鞘翅学会第18回大会実行委員会)

◇新入会員募集◇

日本鞘翅学会は、国内では甲虫関連の最大の組織とはいえ、現在の会員数は約650名に過ぎません。

本会は基本的に、会員の皆様の会費により運営されておりますが、現在の活動を維持するだけでも財政上のゆとりがないのが実情です。このため、やむを得ず会費を値上げしたところですが、今後のさらなる活動の展開には、会員数を増やすことで財源を確保する以外に方法はありません。そこで、入会案内を作成し、広く公布することで、新しい会員の募集を積極的に推進していきたいと考えました。

今後しばらくの間、会の郵便物に入会案内を同封させていただきます。友人知人の甲虫好きの皆様にご覧いただき、私たちの会の発展のために、会員の皆様一人ひとりが新入会員の勧誘にご尽力くださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

甲虫ニュース 第149号

発行日 2005年3月30日

次号は2005年6月中旬発行予定

発行者 高桑正敏

編集者 鈴木 互(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館昆虫第2研究室 電話 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 7,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号,有頭ダブル針も出来ました。その他,採集,製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社